埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第329集

川　越　市

氷川神社遺跡

都市計画道路川越上尾線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告

2007

埼　玉　県

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は、道路整備の基本理念として「人と自然にやさしい道づくり」を掲げ、環境への負荷の低減に十分配慮しつつ、誰もが安心・安全・快適に通行できる道路空間の形成を推進しています。また「時間が読める道づくり」、「安心と活力の道づくり」を推進するという目標のもと、体系的な道路網の整備を行っております。川越市中心部を起点として東へ向かい、荒川を渡って上尾市内までを結ぶ、都市計画道路川越上尾線の整備もそのひとつです。

都市計画道路の起点である川越市は人口33万人を数える、埼玉県南西部の中心都市です。入間川に面した川越は古くから交通の要衝であり、中世に太田道真・道灌親子によって川越城が築城されて以来、江戸時代を通じて城下町として発展してきました。「小江戸」と呼ばれ親しまれた川越市は、近年では首都圏に位置する歴史と文化のまちとして、町並みを保全し都市景観を尊重したまちづくりが進められています。

今回の都市計画道路川越上尾線事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地として氷川神社遺跡があり、その取り扱いについて、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課(当時)が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡や、中世の地下式坑、江戸時代の土坑などが発見されました。なかでも江戸時代の陶磁器が豊富に出土し、城下町川越の歴史を解明する上で貴重な資料が得られました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発および各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました埼玉県県土整備部道路街路課、川越県土整備事務所、川越市教育委員会並びに地元関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年２月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　福田陽充

例　言

1．本書は、都市計画道路川越上尾線（川越市宮下町一丁目11－26他）に所在する氷川神社遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

　氷川神社遺跡（略号：HKWJNJ）

　埼玉県川越市宮下町一丁目11－26番地他

　平成16年4月15日付け　教文第2－3号

3．発掘調査は都市計画道路川越上尾線（川越市地内）建設事業に伴なう記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

　整理報告書の作成は、街路整備工事（埋蔵文化財発掘調査（整理）委託）事業として実施した。

4．本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。本事業の発掘調査については、平成16年4月9日から平成16年4月30日まで実施し、福田　聖、栗岡　潤が担当し、的野善行の補助を得た。整理報告書作成事業は平成18年10月2日から平成18年11月30日まで菊地　真が担当して実施し、平成19年2月28日までに事業団報告書第329集として印刷・刊行した。

5．遺跡の基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。

6．掲載した遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は大屋道則が撮影した。

7．本報告書の出土品の整理・図版の作成は菊地、鈴木孝之、大谷　徹が行い、栗岡、大和田瞳、鈴木理恵の協力を得た。

8．本書の執筆第Ⅰ章－1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、その他は菊地が行った。

9．本書の編集は、菊地が行った。

10．本書に掲載した資料は、平成19年3月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

11．発掘調査から整理・報告書の刊行に至るまで、下記の機関・方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します（敬称略）。

　川越市教育委員会　川越氷川神社

　氷川会館

　天ヶ嶋　岳　岡田賢治　田中　信

　鳥越多工業　平野寛之　平岩俊哉

凡　例

1．本書中におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく座標値（m）を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。

A－1グリッド北西杭の座標は、X＝－8370.0000m、Y＝－30830.0000m。北緯36°04′29.85414″、東経140°10′32.39647″である。

A－1グリッドの世界測地系による換算値はX＝－8724.3766m、Y＝－30536.6794m。北緯36°04′41.35734″、東経140°10′20.57487″である。本書中は世界測地系で示した。

2．遺跡におけるグリッドの設定は、前記座標系に基づいて設置し、10m×10m方眼を基本グリッドとしている。

3．グリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北から順にA・B・C…、東西方向は西から1・2・3…とした。（例　C－2グリッド）

4．本報告書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＪ　竪穴住居跡

ＳＬ　地下式坑

ＳＫ　土坑

5．本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図

全体図　1：300

住居跡・地下式坑・土坑　1：60　1：30

遺物実測図

土器　1：4

土器拓影図・磁器　1：3

鉄製品　1：2　1：3

石製品　1：1　1：4

その他、遺跡位置図、周辺地形図等は、個別に縮尺率を表記している。

6．遺構断面図に表記した水準数値は、海抜標高を示しており、単位はメートル（m）である。

7．遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにし、彩色土器、緑釉陶器については彩色、施釉範囲を網かけで示した。

8．遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。

・口径・器高・底径の計測値は、センチメートル（cm）を単位とする。

・（　）内の数値は復元推定値〔　〕内の数値は残存値である。

・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。

角：角閃石　赤粒：赤色粒子

白粒：白色粒子　黒粒：黒色粒子

小礫：小礫　雲：雲母

針：白色針状物質

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。

・色調は、『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）を基とし、通用表記とした。

・残存率は、図示した器形の部分に対する割合を示した。

9．本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000、川越市発行の都市計画図1/2,500を使用した。

目　次

序

例　言

凡　例

目　次

Ⅰ　発掘調査の概要……1

1．調査に至る経過……1

2．発掘調査・報告書作成の経過……2

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織……3

Ⅱ　遺跡の立地と環境……4

1．地理的環境……4

2．歴史的環境……6

Ⅲ　遺跡の概要……8

Ⅳ　遺構と遺物……11

1．住居跡……11

2．地下式坑……15

3．土坑……18

4．遺構外出土遺物……24

Ⅴ　調査のまとめ……27

写真図版

挿図目次

第１図　埼玉県の地形区分……4
第２図　周辺の遺跡……5
第３図　遺跡調査範囲……9
第４図　基本層序……9
第５図　遺跡全体図……10
第６図　第１号・第２号・第４号住居跡……11
第７図　第１号住居跡出土遺物……12
第８図　第３号・第５号住居跡……13
第９図　第３号住居跡出土遺物……13
第10図　第６号・第７号住居跡……14
第11図　第６号・第７号住居跡出土遺物……14
第12図　第１号地下式坑……16
第13図　第１号地下式坑出土遺物……17
第14図　第２号地下式坑……19
第15図　第２号地下式坑出土遺物……19
第16図　土坑……20
第17図　土坑出土遺物（１）……21
第18図　土坑出土遺物（２）……22
第19図　遺構外出土遺物……25
第20図　氷川神社遺跡の主な遺構・遺物……27

表　目　次

第１表　周辺の遺跡……7
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表……12
第３表　第３号住居跡出土遺物観察表……13
第４表　第６号・第７号住居跡出土遺物観察表……15
第５表　第１号地下式坑出土遺物観察表……17
第６表　第２号地下式坑出土遺物観察表……18
第７表　土坑出土遺物観察表……23
第８表　遺構外出土遺物観察表……26
第９表　川越市周辺の地下式坑……29

写真図版目次

図版1　1　調査区全景（西から）
　　2　調査区東側全景（西から）
図版2　1　第1号・第4号住居跡
　　2　第1号住居跡カマド遺物出土状況
図版3　1　第2号住居跡
　　2　第3号住居跡
図版4　1　第3号住居跡遺物出土状況
　　2　第5号住居跡・第7号土坑
図版5　1　第6号・第7号住居跡
　　2　第7号住居跡遺物出土状況
図版6　1　第1号地下式坑
　　2　第2号地下式坑（東室入口）
図版7　1　第2号地下式坑内部（中央室西側から入口部を臨む）
　　2　第1号土坑
図版8　1　第6号土坑遺物出土状況
　　2　第1号住居跡（第7図1）
　　3　第2号地下式坑（第15図1）
　　4　第7号住居跡（第11図2）
　　5　第7号住居跡（第11図3）
図版9　1　第3号住居跡（第9図1）
　　2　第1号住居跡（第7図3）
　　3　第7号住居跡（第11図1）
　　4　第7号住居跡（第11図4）
　　5　第6号住居跡（第11図9）
　　6　第2号地下式坑（第15図2）
　　7　第2号地下式坑（第15図3）
　　8　第1号地下式坑（第13図4）
　　9　第1号地下式坑（第13図3）
　　10　第1号地下式坑（第13図7）
　　11　第1号地下式坑（第13図8）
　　12　第1号地下式坑（第13図9）
図版10　1　第7号土坑（第18図2）
　　2　臼玉（第11図10）
　　3　臼玉（第13図10）
　　4　臼玉（第19図30）
　　5　第7号土坑（第18図1）
　　6　第7号土坑（第18図3）
　　7　第7号土坑（第18図7）
　　8　第7号土坑（第18図10）
　　9　土製品（第17図15）
　　10　土製品（第17図16）
　　11　土製品（第17図17）
　　12　土製品（第19図26）
　　13　土製品（第19図27）
図版11　1　遺構外出土遺物（第19図1）
　　2　遺構外出土遺物（第19図3）
　　3　遺構外出土遺物（第19図4）
　　4　遺構外出土遺物（第19図5）
　　5　遺構外出土遺物（第19図2）
　　6　遺構外出土遺物（第19図6）
　　7　遺構外出土遺物（第19図7）
　　8　遺構外出土遺物（第19図8）
　　9　遺構外出土遺物（第19図9）
　　10　遺構外出土遺物（第19図11）
　　11　遺構外出土遺物（第19図24）
　　12　遺構外出土遺物（第19図14）
　　13　遺構外出土遺物（第19図15）
　　14　遺構外出土遺物（第19図18）
　　15　遺構外出土遺物（第19図22）

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県では、『彩の国５か年計画21』に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を揚げて、県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、これら県が実施する公共開発事業にかかる埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

都市計画道路川越上尾線整備事業に係る埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについては、平成15年10月３日付け道街第2376号で、埼玉県県土整備部道路街路課長から、文化財保護課長（当時）あて照会があった。

これを受けて文化財保護課では、試掘による確認調査を実施し、氷川神社遺跡（No19－102）の所在が確認された。平成15年11月18日付け教文第2945号で道路街路課長あて、埋蔵文化財の所在及び法手続きに関することとともに、その取り扱いについて、「工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施」することを回答した。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、川越県土整備事務所、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、発掘調査は、平成16年４月９日～平成16年４月30日の期間で実施された。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化財保護法第57条第１項（現第92条）の規定による発掘調査届が提出された。発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成16年４月15日付け　教文第２－３号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

氷川神社遺跡の発掘調査は、平成16年4月9日から平成16年4月30日まで実施した。調査面積は、330㎡である。

4月に事務手続きを行い、ただちに事務所の設置、調査区の表土除去に着手した。

工事の影響を受ける箇所は現道に沿った部分である。調査区は氷川神社・氷川会館の南向かいにあたり、幅約5m、長さ60mにわたる。表土除去を行ったところ、調査区の西側半分までは現代の基礎工事などによる攪乱がおよんでいた。そのため遺構はまったく遺存しなかった。表土除去に引き続いて4月9日に調査区内の基準点測量を実施するとともに、調査を開始して、補助員による遺構確認作業に着手した。遺構確認の結果、住居跡、土坑などを確認し、縄文時代から近世、近代に至る各時代の遺物も確認した。

4月12日からは、確認された遺構の精査を実施した。遺構は順次、覆土の掘り下げを行い、土層断面図の作成を行った。遺物が出土した住居跡や土坑では遺物の出土状況を写真・図面に記録し、遺物を取り上げた。精査の完了した遺構から写真撮影、平面図作成の記録をとり、遺跡の記録保存に万全を期した。確認された遺構のうち、2基は地面の下に地下室を掘り込む地下式坑とよばれる遺構であった。地下式坑の調査では、地下室が一部調査区外にまで延びていると予想されたこと、さらに地下室の天井が発掘により崩落するなどの危険がともなうため、細心の注意を払って調査を実施した。地下式坑は全体の発掘を断念してトレンチ調査によって全体像を把握することとし、発掘作業上の安全確保に努めた。4月26日には調査区の全景写真を撮影し、28日までに無事現地調査を完了した。その後、器材の搬出、事務所の撤収、重機による調査区の埋め戻し作業を行い、4月30日までに現場における作業をすべて終了した。

（2）整理・報告書の作成

氷川神社遺跡の整理作業は、平成18年10月2日から平成18年11月30日まで行った。

10月2日から、出土遺物の水洗・注記、接合・復元作業および写真や図面整理を開始した。遺構図については、図面整理を経て第二原図を作成し、スキャナーで読み込んだ後にコンピュータによるデジタルトレース作業、および土層注記を挿入し編集する作業を進めた。

遺物には、土師器、須恵器、陶磁器などがあり、これらの遺物を順に接合、復元した。その後、拓本、実測を行い、一部はコンピュータを活用して作業を進め、トレース・版組作業を行った。

続いて遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進めて編集作業に着手した。11月下旬に作業を完了させて、印刷業者を選定して原稿等を入稿した。その後校正作業を経て、平成19年2月に報告書を刊行した。

また、図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

平成16年度（発掘調査）

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼管理部長	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部		調査部副部長	坂野和信
管理部副部長	村田健二	主席調査員（調査第二担当）	鰹持和夫
管理部主席	田中由夫	主任調査員	福田聖
		主任調査員	栗岡潤

平成18年度（整理報告書刊行）

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	今泉泰之
総務部		調査部副部長兼資料活用部副部長	小野美代子
総務部副部長	昼間孝志	整理第二課長	富田和夫
総務課長	高橋義和	主事	菊地真

Ⅱ　遺跡の立地と環境

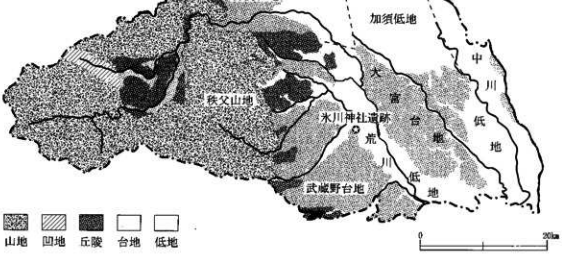
1．地理的環境

氷川神社遺跡は埼玉県南西部に位置し、川越市宮下町一丁目に所在する。ＪＲ川越線の川越駅から北約２㎞、市街地の北北東に位置している。氷川神社遺跡の範囲は川越城の北に鎮座する氷川神社の社地とほぼ重なる。川越市は埼玉県南部に広がる武蔵野台地、および入間台地にまたがっており、東に荒川を臨み、市の西部から北部にかけて入間川が流れる。入間川は北の坂戸市、川島町との境で越辺川、小畔川と合流する（第１図）。

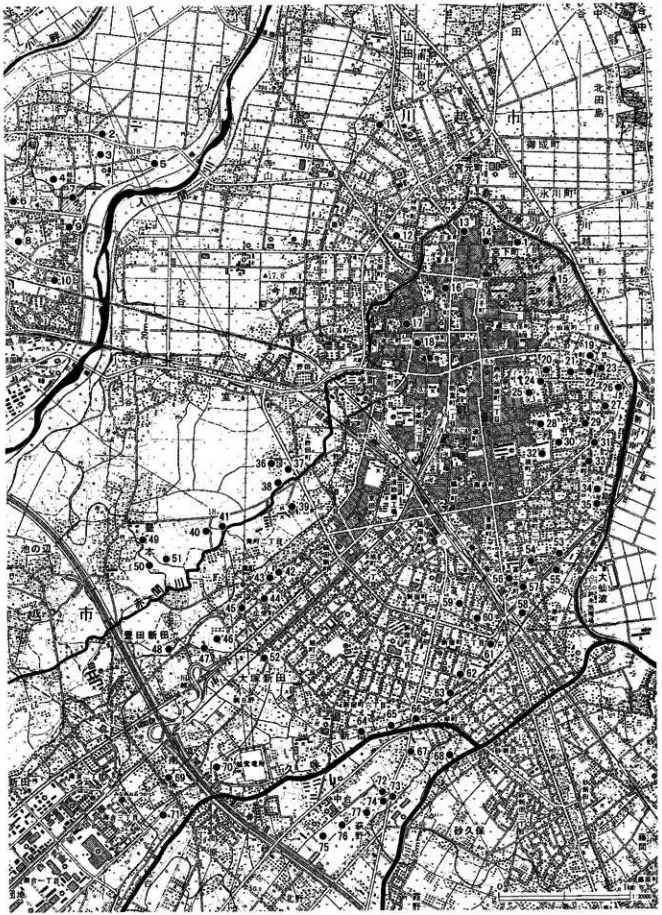
多摩川から荒川の間に広がる地形は、いずれも関東山地から発する河川によって形成されている。現在見る地形は最終間氷期以降（ステージ５ｅ以降）に、それまでの海域が陸域に変化することで発達してきた。川越市の南部・北東部がのる武蔵野台地は、多摩川による扇状地性の台地として知られる。武蔵野台地のうち、埼玉県南部に広がる柳瀬川以北の部分を川越台地と呼び、さらに狭山市尾花台から川越市宮下町までの台地北西端の一画を川越台と呼ぶ。入間台地は、入間川・越辺川・高麗川によって形成された扇状地性の台地を指す。川越市域はこのうち川越台と、入間台地の一部を占めている。

現在の市街地は川越台の北端部に広がり、川越台は武蔵野台地という扇状地の扇の北端にあたる。標高は狭山市側で約60m、北東端の市街地で約20mである。地形は南西方向から傾斜し、荒川に面する北東部で低地と接する。川越駅北東の市街地では、標高は20m前後で比較的平坦である（第２図）。

川越台と低地との境は20mの等高線付近にある。第２図右下で等高線は砂久保から北上して久保川をまたぎ、大仙波で新河岸川とぶつかる。これが地形変換線で、東側に急傾斜を持って下がり、低地へと至る。低地の標高は12m程度である。台地と低地の境はここから段丘崖をなし、新河岸川沿いに宮元町まで北上し、南西へ下って三光町まで明瞭な崖線を形成する。台地は低地へ向かって北に張り出す形となり、低地との比高差は３～７ｍである。等高線はそのまま地形変換線として豊田新田を通って北東―南西方向に直線的に続く。この地形変換線と平行して赤間川が流れる。台地と赤間川の間は図左端の等高線に明らかなように、池の辺までごく緩やかに低



第１図　埼玉県の地形区分



第２図　周辺の遺跡

地に向かって傾斜する面を持ち、この間が2～3mの比高差を持つ傾斜面であることを示している。赤間川左岸には複数の遺跡が点在し、右岸あたりが台地と低地との境となる。台地から低地に至る間のごく緩やかに低地に向かって傾斜する面は、同じ武蔵野台地では東京の谷田川の谷沿いに認められており、台地の間を流れる中小河川でしばしば形成される微地形と見られる。入間川は川越台地と入間台地の間に幅広い谷を形成し、谷底には扇状地性の低地が発達する。入間川右岸の台地沿いに広がるごく緩やかな斜面地形も、最終氷期以降の入間川の河成作用によって形成されたものと考えられる。

2．歴史的環境

入間川の両岸に展開する川越の地では、人間活動の痕跡は旧石器時代から確認される。浅間神社南遺跡（58）では旧石器時代の礫群が検出されている。縄文時代では花見堂遺跡（3）、小仙波貝塚（26）、弁天南遺跡（33）など早期や前期の遺跡がある。小仙波貝塚は縄文海進時に古東京湾最奥部に形成された前期の貝塚である。近隣には上福岡市上福岡貝塚、富士見市打越貝塚、水子貝塚など、同時期の貝塚が数多く残される。縄文中期と比べて後期の遺跡は熊野神社西遺跡（61）など少なく、小畔川左岸の登戸遺跡で堀之内式の住居跡が発掘されている。

川越台では近年、川越城跡（15）で弥生時代中期の竪穴状遺構と土坑が確認された（天ヶ崎2003）。近隣では南東の白子川から柳瀬川流域に10遺跡が分布するほか、北西の入間台地で市内の登戸遺跡、霞ヶ関遺跡（10）において住居数軒が検出されている。後期は川越台ではやや不明確だが、浅間下遺跡（5）や霞ヶ関遺跡に集落が残されている。

古墳時代に入ると遺跡は次第にその数を増す。元町2丁目遺跡（16）、小仙波4丁目遺跡（27）、弁天西遺跡（30）は古墳前期ないし中期の遺跡として知られる。弁天南遺跡（33）では前期の方形周溝墓が確認されており、小仙波一帯に古墳時代前期の集落のあったことが推測される。後期の集落では浅間神社南遺跡（58）があり、久保川の流域にまで広がる様相を示す。仙波古墳群は川越台の東縁に広がる古墳群で、北は多宝塔古墳（24）から南は浅間神社古墳（57）までを含む。古墳後期と考えられる。ほかに久保川流域に中台山古墳（66）など3基があり、山王脇遺跡（46）でも周溝が検出されている。

奈良・平安時代では東山道が川越市内を通過し、古海道東遺跡で東山道武蔵道と中世の鎌倉街道が重複するのが確認されている（2006年9月8日付け新聞各紙）。東山道の東約1kmに位置する霞ヶ関遺跡（10）は奈良時代からの集落で、平安時代には周辺の天王遺跡（9）などへ展開する。9世紀前葉には溝と柵あるいは塀で区画した中に掘立柱建物群が建てられる。霞ヶ関遺跡では「入厨」と墨書された須恵器が出土しており、入間郡衙の有力候補のひとつである（平野2002）。川越台に広がる遺跡は弁天西遺跡（30）をはじめとして集落が広がるが、仲町遺跡（18）では大型住居跡や方形井戸とともに緑釉陶器稜碗なども出土している。

中世には入間川の両岸に遺跡が展開する。とくに中世前半は河越館（6）のある入間川北岸が主体となる。河越館の成立と変遷は平安時代末から南北朝時代に活躍した河越氏の動向と密接に関わるが（川越市立博物館2000）、ここでは割愛する。川越は室町時代中期になると山内上杉氏と扇谷上杉氏の勢力争いの場となった。扇谷家は宝徳元年（1449）頃から川越地方に支配を延ばしたと見られ、長禄元年（1457）に太田道真・道灌に岩付城、江戸城と共に川越城（15）の築城を命じている。この頃山内家は河越館を拠点としており、入間川を面して両者は対峙した。その後川越城は天文6年（1537）に北条氏綱の手に渡り、後北条氏の関東の一拠点となった。

川越城は天正18年（1590）の北条攻めに際し落城し、酒井重忠が川越藩主となって近世の川越が始まる。徳川の天下となって後、川越は江戸時代を通じて江戸の北の守りとして重視され、幕末まで親藩の

第1表　周辺の遺跡

No	遺跡名	時代
1	氷川神社遺跡	古墳、奈良・平安、中世、江戸
2	会下遺跡	古墳後期、奈良・平安、中世、江戸
3	花見堂遺跡	縄文早期、古墳後期～室町、江戸
4	龍光遺跡	古墳、平安、鎌倉
5	浅間下遺跡	弥生、古墳前期・後期、平安、鎌倉
6	新田屋敷遺跡	古墳、奈良・平安、中世（13～14世紀）、江戸
7	三芳館跡	中世（12～16世紀）
8	山王久保遺跡	古墳、奈良・平安
9	天王遺跡	古墳、平安、戦国
10	霞ヶ関遺跡	弥生、古墳前期・後期、奈良・平安、中世（15～16世紀）
11	南山田遺跡	弥生、古墳、奈良・平安
12	神明町遺跡	平安
13	歌明寺南遺跡	南北朝、戦国、江戸
14	宮下町２丁目遺跡	中世、江戸以降
15	川越城跡	縄文、奈良・平安、室町～江戸
16	元町２丁目遺跡	古墳前期・後期、中世、江戸
17	末広町１丁目遺跡	江戸
18	仲町遺跡	奈良、平安、江戸
19	小仙波２丁目Ａ遺跡	縄文中期、古墳後期、奈良・平安
20	喜多院境内遺跡	平安、鎌倉～戦国、江戸
21	小仙波２丁目Ｂ遺跡	縄文中期、古墳後期、奈良・平安
22	小仙波２丁目Ｂ遺跡	古墳後期、平安
23	小仙波２丁目Ｃ遺跡	古墳後期、奈良・平安
24	多宝塔古墳	古墳後期
25	慈眼堂古墳	古墳後期
26	小仙波貝塚跡	縄文早期～中期、古墳後期、奈良・平安
27	小仙波４丁目遺跡	縄文早期～中期、古墳前期～後期、奈良・平安、中世
28	中院遺跡	鎌倉～戦国、江戸
29	三変稲荷神社古墳	古墳前期
30	弁天西遺跡	縄文早期・中期、古墳、奈良・平安、中世（13世紀～）
31	弁天上遺跡	縄文中期・後期、古墳、奈良・平安
32	仙波古代集落跡	古墳、平安
33	弁天南遺跡	縄文前期、古墳前期・中期・後期、奈良・平安、中世
34	堀之内遺跡	縄文前期・中期
35	仙波氏館跡	鎌倉
36	上野田Ａ遺跡	奈良・平安
37	上野田Ｂ遺跡	奈良・平安
38	大下遺跡	奈良・平安
39	野田中北遺跡	奈良・平安
40	石田遺跡	奈良・平安
41	会の田遺跡	奈良・平安
42	寿町東遺跡	古墳後期、奈良・平安
43	寿町遺跡	古墳後期、奈良・平安
44	広栄町遺跡	古墳後期、奈良・平安
45	大屋敷遺跡	古墳
46	山王脇遺跡	縄文中期、古墳、奈良・平安
47	山王堀内遺	古墳後期
48	大陣遺跡	平安
49	寺川遺跡	平安
50	道遺跡	平安
51	第六天遺跡	平安
52	並木東遺跡	奈良・平安
53	氷川神社古墳	古墳
54	仙波小東遺跡	古墳
55	愛宕神社古墳	古墳、江戸
56	仙波小南遺跡	古墳
57	浅間神社古墳	古墳後期
58	浅間神社南遺跡	旧石器、縄文、古墳後期、奈良・平安、中世、江戸
59	東裏遺跡	縄文、古墳、南北朝
60	新宿２丁目遺跡	縄文、奈良・平安、江戸
61	熊野神社西遺跡	縄文後期、古墳後期、奈良・平安
62	新宿３丁目遺跡	縄文、奈良・平安
63	新宿４丁目遺跡	縄文中期、奈良・平安
64	塚遺跡	縄文中期
65	新宿小南遺跡	縄文中期、奈良、鎌倉
66	中台山古墳	古墳後期
67	八雲神社古墳	古墳
68	八雲東遺跡	奈良・平安
69	旭野遺跡	縄文、古墳、奈良・平安
70	逆塚遺跡	奈良・平安
71	富士見野遺跡	平安
72	中台Ｂ遺跡	縄文後期、古墳
73	中台Ａ遺跡	縄文中期
74	はた塚古墳	古墳
75	大塚遺跡	縄文中期・後期、弥生
76	中台元川越分遺跡	縄文、古墳、平安
77	中台Ｃ遺跡	縄文中期・後期、奈良・平安

＊文献（番号は遺跡番号）　特記以外は川越市教育委員会1996～2004、埼玉県教育委員会による。2：小泉・城近・田中1988、小泉・城近1988、3：田中・落合1996、5：小泉・城近・田中1988、6：萩野・岡田2001、7：矢ヶ崎2001、10：平野2003、27：小泉1993b、30：平野2002、45：田中・町田1992、46：下野2004、55・60：天ヶ崎2003、61：小泉1993a、69：田中1988

松平家や幕府重鎮の柳沢吉保などがこの地を治めた。

川越氷川神社の創建は古く、541年に今の大宮氷川神社を分祀したと伝える。太田道真・道灌、また江戸時代の歴代藩主により篤く崇敬された。宮下町の地名は氷川神社の下に位置することによる。川越氷川祭礼は毎年10月に行われ、江戸三大祭にならった豪華な祭りであり、現在でも川越祭として親しまれている。江戸時代の本調査地点の土地利用を絵地図でたどると、まず「武州川越城図」（正保４年～寛文２年（1647～1662）成立）では氷川神社と道を挟んで眼勝寺という寺院が見える。これは源昌寺という酒井重忠が開いた菩提寺のことで、寛永11年（1634）に酒井家の移封と共に移転する（「樹木屋鋪」「川越素麺」（寛延２年以前））。元禄７年（1694）の「川越御城下絵図面」では竹林である。ほかの絵地図も同様で、17世紀後半の一時期を除き、18世紀半ばまで樹林地であったことが分かる。

調査地点付近に再び施設等が認められるのは安永７年（1778）の「川越城下図」で、氷川神社の社地が道を挟んで南側に広がる。川越では幕末にかけ次第に武家地が拡大し、氷川神社周辺にも武家屋敷が及んでくる。「川越城下図」（弘化・嘉永年間前後（1844～1854）作製）では一帯は武家屋敷となっており、調査地点は18世紀後半の一時期氷川神社の社地となったものの、18世紀末には武家屋敷に転じ、幕末へと至った（川越市立博物館1997ａ）。

Ⅲ　遺跡の概要

氷川神社遺跡は、現在の川越氷川神社境内、氷川会館およびその南側一帯を範囲とする遺跡である。今回調査を行ったのは、遺跡南側の東西約60mにわたる範囲であり、現道に沿った幅の狭い調査区である。調査面積は330㎡である（第３図）。

表土掘削を行った結果、調査区は西側約半分において、現代の基礎工事などにより現地表面から最大1.2mまで掘削がおよんでいた。この攪乱の影響により、調査区西側に遺構は遺存していなかった。そのため実質的な発掘調査は調査区の東側半分において実施された。基本層序は調査区の東側で確認した（第４図）。現地表面から20cm弱は現代の表土であり、その下にやはり20cm程度、明治から昭和前期までと考えられる近代の土が堆積する。さらに約15cmから近世の土が一様に堆積している。出土遺物から見て、江戸時代後期が主体と見られる。近世の土をおよそ除去したところで関東ローム層が露出し、これを遺構確認面とした。調査区内はほぼ平坦で、遺構確認面の標高は約15.3mである。

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡７軒、地下式坑２基、土坑９基であった。出土遺物の総量は、コンテナ７箱である。

遺物の時期は、縄文時代、弥生時代、古墳時代中期から後期、奈良・平安時代、中世、近世、近代のものがある。このうち縄文時代、弥生時代の遺物は包含層からごくわずかに出土している。遺構は確認されていないが、付近に縄文・弥生時代の遺構等の存在を示唆するものである。遺物の主体は古墳時代から近世である。

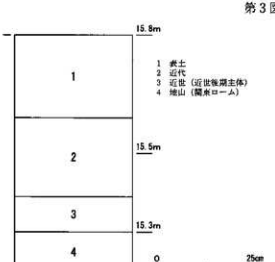
以下に、各遺構に見られる特徴をまとめる。

住居跡は、大きく古墳時代と奈良・平安時代に分かれる。古墳時代の住居は第３号住居跡、第５号住居跡、第７号住居跡である。奈良・平安時代の遺構は第１号住居跡、第２号住居跡、第４号住居跡、第６号住居跡である。住居跡はいずれも後世の攪乱が著しく、掘り込みがほとんど無いかあってもごく浅くしか確認されず、大半が住居の周溝のみの調査となった。また調査区の関係から、住居跡の全体の規模や形状を明らかにできたものはなかった。古墳時代の住居では第７号住居跡で貯蔵穴を確認し、なかから高坏を検出した。また調査区内もふくめて、臼玉が数点確認されている。奈良・平安時代の住居跡では、第１号住居跡でカマドを部分的に確認した。カマドは攪乱による破壊が大きかったが、土製支脚や完形の須恵器坏、鉄製鎌が出土した。ほかに第２号地下式坑から墨書土器、緑釉陶器が出土した。古墳時代、奈良・平安時代とも、検出された遺物はさほど多くない。

地下式坑は２基検出され、いずれも中世と考えられる。第１号地下式坑は攪乱が接するが、地下室部分は天井が部分的に崩落している以外、良好に残されていた。第２号地下式坑も地下室部分は良好に残っていたが、地下室の真上に大きな樹木による攪乱があったため、攪乱部分を避け、トレンチ調査により遺構の形状等の把握を行った。どちらの地下式坑も作業上の安全を考慮し、地下室部分の完掘は行い得なかった。地下式坑の出土遺物は、多くは周囲の住居から混入したとみられる古墳～平安時代の遺物であった。地下式坑にともなうものとして、中世の常滑産陶器が出土している。

土坑は９基ある。形状はさまざまだが、出土遺物に陶磁器をともなう例が多く、多くは近世と考えられる。近世の土坑は第１号、第６号、第７号、第10号、第11号、第12号の６基である。第13号土坑は、ほとんどが攪乱されていて不明だが、古代以前の住居跡等の一部の可能性もある。近世の遺物はいわゆる瀬戸・美濃産の陶磁器が主体を占めている。碗、甕、すり鉢、灯火具、土瓶など、一般的な器種が認められる。第７号土坑では、破片資料だが飯能焼を検出した。飯能焼は、埼玉県飯能市で江戸時代後半から明治時代前半にかけて焼かれた陶器として広く知られている。第７号土坑の時期は江戸時代後半と

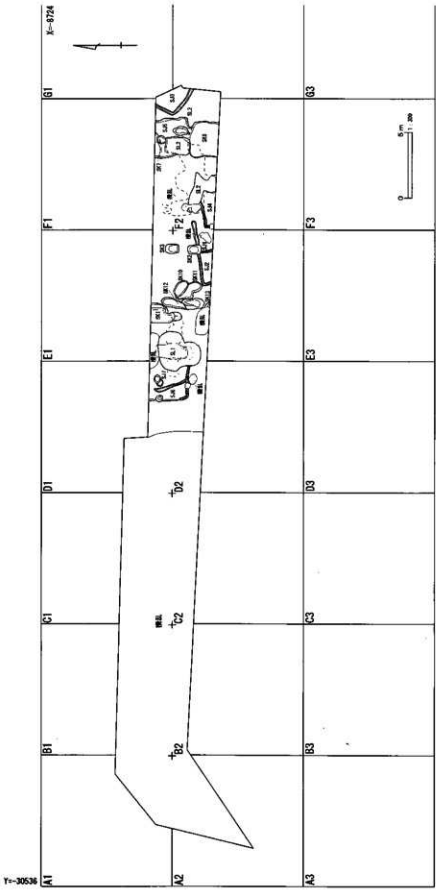
第３図　遺跡調査範囲



第４図　基本層序

考えられ、いわゆる明治時代には入らない。

今回の調査では、近代の遺物も少なからず検出された。近代の土坑は第２号、第３号土坑である。これら近世から近代にかけての資料は、氷川神社周辺での19世紀頃から明治時代までの状況を考えるうえで、良い材料になるものと考えられる。



第５図　遺跡全体図

Ⅳ　遺構と遺物

1．住居跡

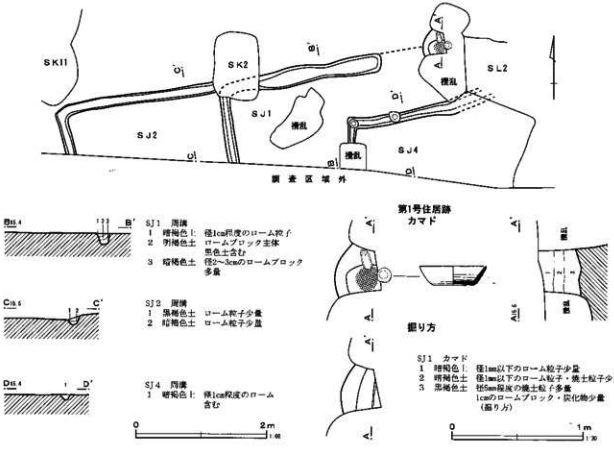
第1号住居跡（第6図）

第1号住居跡はE－2、F－2グリッドに位置している。確認面は住居跡の床面とほぼ同じで、掘り込みは残っていなかった。住居跡は北側の一部にあたる周溝とカマドが確認された。遺構は北西隅を第2号土坑、東側を第2号地下式坑によって切られる。北西寄りの床面には攪乱が入り、カマドもその大半が攪乱によって壊されていた。住居西側で第2号住居跡、南東で第4号住居跡と重複するが、遺構がいずれも周溝のみの確認であったため、住居跡相互の切り合い関係は不明である。

住居跡の平面形は方形と見られる。主軸方向はN－13°－Wをとる。確認された範囲での規模は東西が残存長3.5m、南北が1.6mである。周溝は住居西から北にかけてL字状に掘り込まれており、カマドの手前で途切れる。幅は最大で28cm、深さは12cmを測る。覆土は主にロームブロックを含む暗褐色土からなる。

カマドは北カマドである。北・東・南を攪乱によって壊され、燃焼部西側のみを確認した。規模は東西・南北とも33cm、深さ20cmである。3層上面に焼土が広がる。焼土上から支脚と坏が検出された。支脚は使用時の直立状態をおよそ保ち、坏は東側にずり落ち攪乱にはみ出た形で検出された。いずれも2層にともない、使用面は3層上面と推定される。3層はカマド掘り込みの埋め土で、掘り込みは階段状に東側中央に向ってやや深く掘られる。

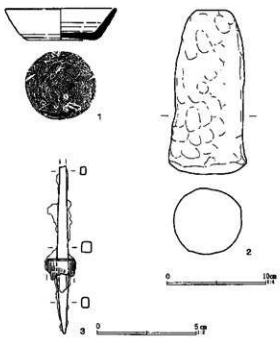
出土遺物は数点で、すべてカマド覆土から出土している。図示したもののほか、土師器長胴甕の破片が1点出土している。前述の須恵器の坏、土製支脚



第6図　第1号・第2号・第4号住居

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表（第７図）

挿図番号		種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎　土	焼成	色　調	備　考
7	1	須恵器	坏	11.2	3.2	6.5	完形		良好	灰	口縁に自然釉（一部）　東金子産
7	2	土製品	支脚	高さ16.7　幅7.8×7.0			完形		普通	にぶい黄橙	被熱による赤色化若干あり
7	3	鉄製品	錐	長さ［8.6］幅×厚さ：錐部先端　0.3×0.4，元部　0.55×0.55，基部元部　0.4×0.5cm							先端部欠損　無機質化した木質が遺存



第７図　第１号住居跡出土遺物

のほか、鉄製の錐が出土している（第７図）。

住居の時期は平安時代と考えられる。

第２号住居跡（第６図）

第２号住居跡はＥ－２グリッドに位置している。住居跡の掘り込みは残っておらず、周溝のみが確認された。第２号土坑に周溝を切られる。遺構は南側の大半が調査区外にある。東側で第１号住居跡と重複するが、遺構相互の切り合い関係は不明である。

住居跡の平面形は方形と見られる。主軸方向はＮ－10°－Ｗをとる。確認された範囲での規模は東西が2.36m、南北が1.2mである。周溝は西から北にかけてＬ字状に確認された。幅は最大で18cm、深さは12cmを測る。

出土遺物はない。

住居跡の主軸方向が第１号住居跡とほぼ同じであり、第１号住居跡と近接する時期に営まれた可能性が考えられる。

第３号住居跡（第８図）

第３号住居跡はＦ・Ｇ－１・２グリッドに位置している。住居西側のコーナー部のみが検出され、大半は調査区外にある。

住居跡の平面形はほぼ方形と見られ、南西側の壁が外側にやや膨らみを持つ。主軸方向はＮ－35°－Ｅをとる。確認された範囲での規模は東西に2.58m、南北に1.94mである。確認面から床面までの深さは８cmと浅い。覆土は２層で、北壁では住居隅を周溝ごと埋める７層の暗褐色土が確認されたが、他の部分では６層と区別できなかった。周溝は壁沿いに幅20cm、深さ11cmに掘られる。

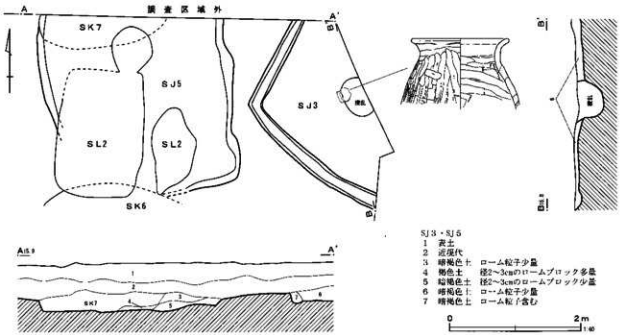
出土遺物は１点のみで、壁際で検出された（第９図１）。長胴気味の甕である。

住居の時期は古墳時代後期と考えられる。

第４号住居跡（第６図）

第４号住居跡はＦ－２グリッドに位置している。第１号、第２号住居跡と同様に掘り込みは残されておらず、周溝のみが確認された。遺構は南側の大半が調査区外にあり、東側は第２号地下式坑に切られる。北側に位置する第１号住居跡との切り合い関係は不明である。

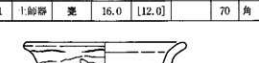
住居跡の平面形は方形と見られる。確認された範囲での規模は東西が2.86m、南北が1.28mである。主軸方向はＮ－10°－Ｗをとる。周溝は西から北にかけてＬ字状に確認された。周溝は南西端が攪乱を受け、東側も攪乱などにより不明瞭となる。幅は最大で16cm、深さは８cmを測る。北側周溝内で深さ12cmほどのピットが２基確認され、住居にともなうピットの可能性がある。



第8図 第3号・第5号住居跡

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表（第9図）

挿図番号		種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
9	1	土師器	甕	16.0	[12.0]		70	角 小礫 赤粒	良好	赤褐	体部外面粗いヘラミガキ



第9図 第3号住居跡出土遺物

出土遺物はない。

住居跡の主軸方向が第1号住居跡とほぼ同じであり、近接する時期に営まれた可能性が考えられる。

第5号住居跡（第8図）

第5号住居跡はF－1・2グリッドに位置している。住居の北側が一部調査区外にある。遺構の直上に大きな根による攪乱があったほか、後世の第2号地下式坑、第6号土坑、第7号土坑に大きく壊される。このため住居の残りは悪く、遺構の形状はやや不整形であった。

住居跡の東壁が直線的に延びるのに対し、西壁は攪乱の影響で南東へ緩やかな弧を描く。本来の住居跡の平面形は方形であったと見られる。主軸方向はN－10°－Wをとる。確認された範囲での規模は東西に2.6m、南北に2.95mである。確認面からの深さは21cmを測る。周溝は確認されなかった。

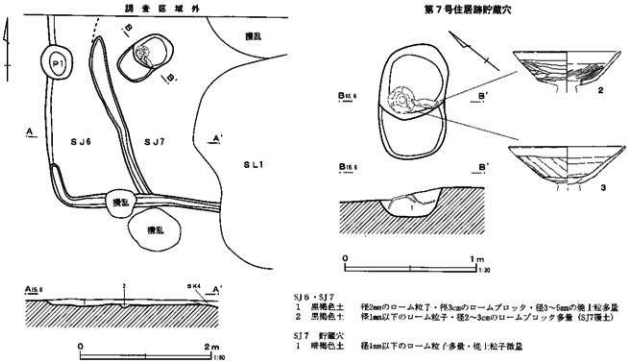
出土遺物はない。遺構の形態等から、古墳時代に営まれたと考えられる。

第6号・第7号住居跡（第10図）

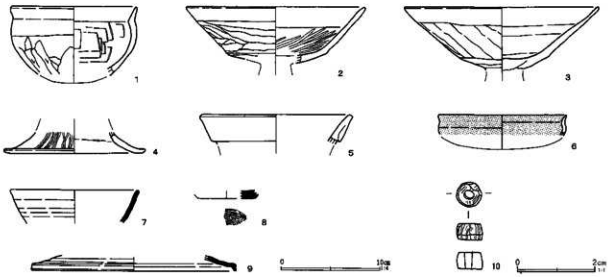
第6号・第7号住居跡はD－1・2グリッドに位置している。住居の北側が一部調査区外にあるほか、東側を第1号地下式坑に大きく攪乱される。住居跡は重複して構築されており、第6号住居跡が新しく、第7号住居跡を切る。掘り込みは極めて浅く、第6号住居跡の掘り込みが僅かに確認された。第7号住居跡は第6号住居跡によって床面まで壊され、周溝など遺構の一部しか確認されなかった。

（第6号住居跡）

第6号住居跡は方形と見られる。主軸方向はN－2°－Wをとる。確認された範囲での規模は南北に



第10図　第６号・第７号住居跡



第11図　第６号・第７号住居跡出土遺物

2.65m、東西に2.94mである。確認面からの深さは11cmを測る。住居南側で周溝が確認され、西南隅にかけて延びる。周溝は幅20cm、深さ９cmである。住居西壁にかかる形で直径54cmのピットが掘られる。切り合い関係は明らかでないが、住居にともなう可能性もある。

（第７号住居跡）

第７号住居跡は隅丸方形と見られる。主軸方向はN－20°－Wをとる。確認された範囲での規模は南北に2.5m、東西に3.1mである。住居南西で周溝が、北西隅で貯蔵穴が検出されている。周溝は幅18cm、深さ４cmで住居西壁沿いの溝と見られる。貯蔵穴の平面は楕円形で、長軸方向はN－50°－Eをとる。規模は長さ88cm、幅48cm、深さは西側８cm、東側30cmである。貯蔵穴は東側が深く掘られ、西側との段差付近で高坏２点が出土した。高坏は１点が坏を下に伏せた状態で、１点は横倒しの状態で検出された。脚部は見つからなかったため詳細は不明だが、貯蔵

第4表　第6号・第7号住居跡出土遺物観察表（第11図）

挿図番号		種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
11	1	土師器	鉢	(12.6)	[7.0]		30	白粒 赤粒	良好	橙褐	SJ7 底部丸平底か
11	2	土師器	高坏	18.0	[5.7]		80	角 赤粒 小礫	良好	橙褐	SJ7 坏部内外面ミガキ
11	3	土師器	高坏	19.5	[6.3]		95	角 白粒 赤粒	良好	橙褐	SJ7 内面の器面荒れる 焼き歪みあり
11	4	土師器	高坏		[2.2]	(14.4)	20	角 赤粒 黒粒	良好	赤褐	SJ7 脚部外面ヘラミガキ
11	5	土師器	壺	(15.0)	[3.0]		破片	白粒 赤粒	普通	淡褐	SJ7 器面磨耗 複合口縁壺
11	6	土師器	坏	(13.0)	[2.0]		破片	白粒 赤粒	良好	淡褐	口径不定 比企型坏
11	7	須恵器	坏	(13.0)	[3.4]		破片		不良	灰白	SJ6 口径不定 胎土南比企に近い
11	8	須恵器	坏		[0.7]	(6.0)	破片	針	普通	灰黄	SJ6 東金子窯
11	9	須恵器	蓋	(17.1)	[1.5]		破片	針	普通	灰	SJ6 東金子窯
11	10	石製品	臼玉	径：上0.58，下0.61，最大0.62　厚さ0.38cm　重量0.24g							SJ7 上下研磨 ド節れ

穴の浅い段の方に置かれていたものが、北東側の深い貯蔵穴内に転倒した可能性がある。

（出土遺物）

遺物は第6号住居跡の覆土および第7号住居跡の貯蔵穴から出土した。貯蔵穴出土遺物以外はいずれも土師器、須恵器の小片を主とし、十数点にとどまる。覆土出土遺物は混在するが、大きく二時期に分けられ、住居跡の時期もこれに対応するものと考えられる。

第11図1～5は古墳時代中期の土師器である。2、3は貯蔵穴出土の高坏で共に坏部のみを残す。6は混入品と見られる。7～9は奈良・平安時代の須恵器である。10は滑石製の臼玉で、第6号住居跡にともなう。

時期は第7号住居跡が古墳時代中期、第6号住居跡は奈良時代と考えられる。

2．地下式坑

今回、地下室をもつ地下式坑が2基検出された。発掘調査時には第4号土坑、第5号土坑として調査されたが、2つの土坑は遺構の形状などの諸特徴が、ほかの土坑と明らかに異なっている。そのため本報告書では地下式坑として項目を分け、第1号地下式坑（旧・第4号土坑）、第2号地下式坑（旧・第5号土坑）として報告する。

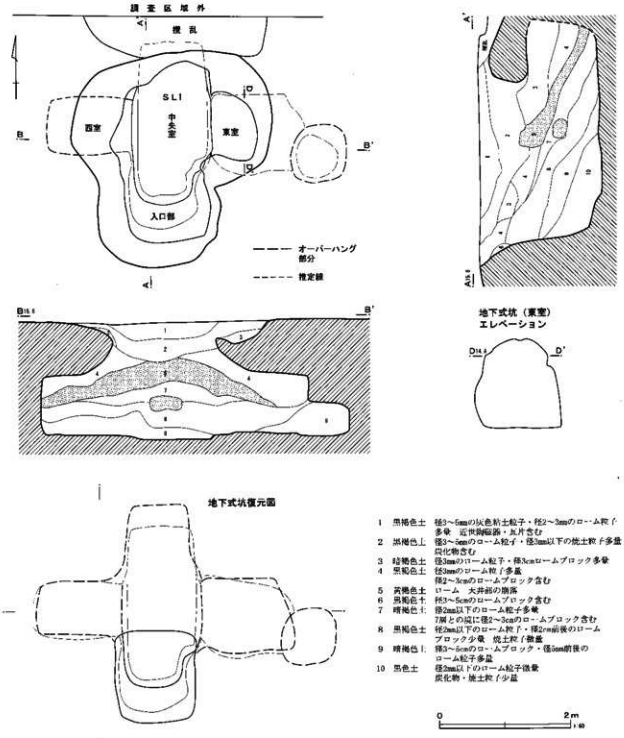
第1号地下式坑（第12図）

第1号地下式坑はD・E－1・2グリッドに位置している。北壁際に攪乱があるが、地下式坑にはほとんど及んでおらず、残りは良好であった。西側で第6号・第7号住居跡を切る。地下室の北側部分は調査区外にまで延びる可能性があり、北側・西側の地下室は全体を検出できなかった。

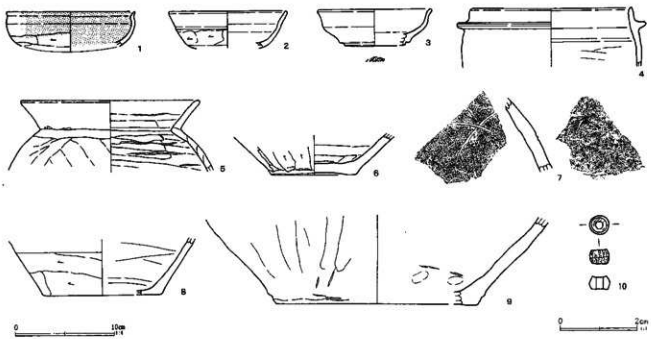
第1号地下式坑は、平面形が「十」字形を呈する。覆土中に天井の崩落土（第5層）がはっきり観察されるが、南寄りで崩落土は確認されない。また地下室を埋める土層は6～9層まで、南から北へ斜めに流れ込んでおり、おそらく南端が地下式坑の入り口であったと考えられる。以下、第1号地下式坑の各部分を、入口部、中央室、西室、東室と呼称する。地下式坑はほぼ真北をとり、入口部が下にやや低い段を持って掘り込まれ、中央室でも長さが深くなり、長方形の平坦面を作り出す。中央室から一段上がって西室・東室が掘り込まれ、それぞれ略長方形を呈する。東室の南東奥には、さらに小さな穴が掘り込まれる。

地下式坑の規模は、最大長で南北3.4m（推定含む）、東西4.54mを測る。入口部は幅1.3m、中央室までの長さが約1.2m、深さ1.68mで0.36m×1mの段を作り、さら0.12mほど下がって底に到る。底部での幅は0.7mを測る。中央室は入口部よりやや幅広い長方形を呈する。規模は南北1.77m、東西

1.04mで、確認面からの深さは1.82mを測る。南北断面図にあるように、地下式坑中央の天井は後に崩落する。1層に近世陶磁器が含まれ、地下式坑は上面中央にしばらく凹みを残していた。中央室の北奥は天井が残り、高さ1.05mとなる。北奥壁の位置はボーリングステッキ等で確認したが、西・東室の規模からすると図よりさらに北の調査区外にまで延びる可能性がある。西室・東室は中央室から10cm床が高く、西室の規模は南北0.86m、東西1.34m、高さ0.9mを、東室で南北1.2m、東西1.4m、高さ0.9mを測る。東室の中央付近のエレベーションから明らかなように、地下室の横断面は方形ではなく天井が



第12図　第1号地下式坑



第13図　第１号地下式坑出土遺物

第５表　第１号地下式坑出土遺物観察表（第13図）

挿図番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
13	1	土師器	坏	(13.0)	[3.5]		20	赤粒 白粒 小礫 針	良好	赤褐	比企型坏
13	2	土師器	坏	(11.9)	[4.7]		15	雲 針	普通	橙	相模型坏
13	3	土器	坏	(11.6)	[3.6]	(6.2)	20	赤粒	普通	橙	土師質
13	4	土器	羽釜	(17.0)	[5.9]		破片		普通	橙	器面非常に荒れる
13	5	土師器	甕	(17.8)	[7.2]		25	角 赤粒	良好	橙褐	体部外面ナデ
13	6	土師器	甕		[3.7]	(8.6)	45	角 赤粒 小礫	良好	暗赤褐	内面に煤が厚く付着
13	7	陶器	甕		[7.9]		破片		普通	灰オリーブ	常滑産　外面上部に自然釉
13	8	土器	土鍋か		[5.6]	(11.9)	破片	雲	普通	灰黄	土鍋または鉢
13	9	陶器	甕		[9.0]	(20.4)	破片		普通	にぶい褐	常滑産　内面磨滅する
13	10	石製品	臼玉	径：上0.39，下0.42，最大0.47　厚さ0.32cm　重量0.11g							上下研磨　中央に稜線

カマボコ状に丸みを帯びる。東室の南東奥にはさらに小規模な部屋を持つ。隅丸方形で規模は南北0.86m、東西0.84m、高さ0.5mを測る。第１号地下式坑を復元すると、入口部が約１m四方を呈し、中央から北、西、東に約1.4m×１mの長方形の部屋を持つ（第12図下）。

出土遺物は他の遺構に比べかなり多量である。周囲の遺構から流れ込んだ土師器、須恵器の破片を多く含む。地下式坑にともなう遺物は比較的少なく、底面付近から常滑産陶器が出土している。

図示したうち、確実に地下式坑にともなう遺物は第13図７、９の常滑産の甕である。３は鎌倉以降の銅碗や瀬戸の仏供に類品が認められ、仏具の碗を模倣した土器の可能性がある。古墳時代中期の遺物（５、６、10）は第７号住居跡にともなう可能性が高い。

地下式坑の時期は中世と考えられる。

第２号地下式坑（第14図）

第２号地下式坑はＦ－１・２グリッドに位置している。西端で第１号、第４号住居跡を切り、北東端で第５号住居跡を切る。攪乱は西端にあるほか、地下式坑の真上に大きな樹木による攪乱があり、安全面から地下室全体の発掘は行わず、トレンチにより規模、形状を把握した。

第２号地下式坑は南側に入口部があり、上坑全体はヤツデの葉状に３つの部屋に分かれる。以下、第

第6表　第2号地下式坑出土遺物観察表（第15図）

挿図番号		種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
15	1	土師器	坏	11.1	3.7	5.1	完形	雲母	普通	明黄褐	墨書「无」　ロクロ土師器
15	2	緑釉陶器	埦	(18.9)	[3.5]		破片		良好	灰	緑釉内面はげる
15	3	陶器	壺		[7.0]		破片		普通	灰オリーブ	常滑産　外面自然釉

2号地下式坑の各部分を、入口部、西室、中央室、東室と呼称する。第2号地下式坑の方位は第1号地下式坑と同様、ほぼ真北をとる。南端の入口部の規模は南北0.78m、東西1.46m、深さ1.45mを測り、調査区外まで及んで正方形をなすとみられる。中央室の規模は南北1.24m、東西4.8m、確認面からの深さ1.66mを測る。天井部は東脇等で残されており、中央室の高さは約1.2mである。入口部より最大で約20cm深くなるが、入口部との境に段は持たない。中央室の北奥はさらに小部屋状となり、南北0.88m、東西が入口側1.70m、北壁0.9mの台形を呈する。西室は中央室から一段上がり、段差は9cmある。規模は南北1.1m、東西1.16m、天井までの高さ1.1mを測る。中央室との段差付近、西壁に穴があり、三角錐状に掘り込まれる。穴の幅は0.5m、奥行き0.64mを測る。西室の北奥壁には別に2つの穴が並ぶ。平面は細長く不整形で、入口は楕円形を呈する。規模は共にほぼ同じで入口の幅0.28m、高さ0.44m、奥行きは0.68mである。東室は西室と同様、中央室から一段上がり、段差は60cmである。北側に向って長方形に広がり、規模は南北1.9m、東西1.32m、深さは確認面から1.2mを測り、天井までの高さは約0.5mである。東室の断面を観察すると3、4層はロームブロックを含むが中央室ほど天井の崩落として明瞭ではない。天井の痕跡が不明瞭なことに加え、中央室との段差が大きく確認面からさほど深くないことから考えて、東室も入口として開口していたと推測される。東室の外には、東と北にそれぞれ付随するピットが検出されている。北側のピットは直径0.65m、深さ0.23m、東側のピットは南北1.34m、東西0.68m、深さ0.3mを測る。性格は不明である。

出土遺物は第1号地下式坑と比べ少ない。小片が多く図示できたのは3点のみである。第15図1は墨書土器で底部を上にして書かれる。字は左はらいと右はねが明瞭で、「无」と考えられる。「無」と同義である。2は緑釉陶器の埦で1cm四方の同一個体の破片が他に1点出土した。生地は堅く焼かれる須恵で、緑釉がはげている。畿内周辺産の可能性がある。1と2は同時期と見られる。3は底面付近から出土した常滑産の甕で、ほかに1点出土している。また中央室から骨が出土した。底面上約70cmで天井崩落土より下に位置する。長さ約10cm、径3cm大、残りが悪く取り上げ時に崩れてしまったが獣骨であろう。

第2号地下式坑の時期は、中世と考えられる。

3．土坑

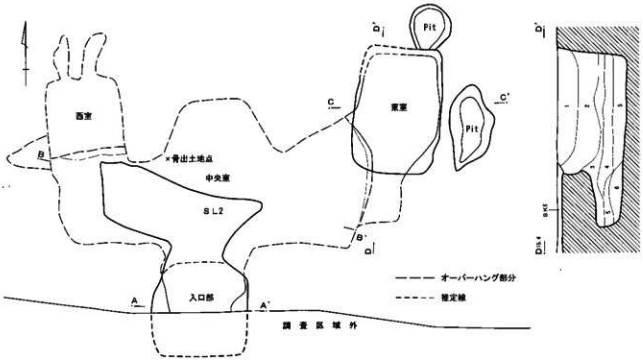
土坑は合計9基である。遺構番号はSK13まであるが、整理の段階で第4号、第5号土坑は地下式土坑に番号を振り替えた。第8号、第9号土坑は欠番である。

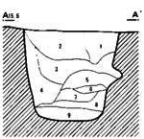
第1号土坑（第16図）

E－1・2グリッドに位置している。平面形は不整長方形で東側に張り出しがある。主軸方向はN－0°－Eをとる。規模は深い部分で南北1.8m、東西1.14m、深さ0.52mを測る。南に長さ0.54mの浅い斜面を、東に確認面からの深さ約20cmで、幅0.32mの段を持つ。

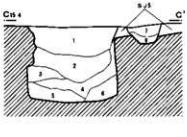
出土遺物は近世の陶磁器類からなる。第17図1、2は同一個体。3は砥石で上部が折れている。

第1号土坑の時期は他の土坑出土遺物との関係から19世紀代とみられる。

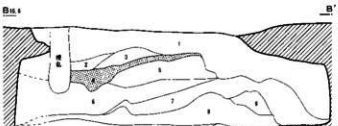




A−A'
1 褐色土　ロームブロック・礫を含む(撹乱か)
2 暗褐色土　径1mmのローム粒子少量
3 黒褐色土　径1mmのローム粒子少量
4 黒褐色土　径1mmのローム粒子多量
5 褐色土　径2〜3cmのロームブロック多量　炭化粒子少量
6 暗褐色土　径1cm以下のロームブロック少量
7 暗褐色土　径3〜4cmのロームブロック少量
径1cm以下のローム粒子中量　焼土粒子微量
8 暗褐色土　径5cm程度のロームブロック多量
9 黒褐色土　径2〜3cmのロームブロック多量



C−C'、D−D'
1 暗褐色土　径1cmのロームブロック・炭化物多量
2 黒褐色土　径1cmのロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
3 褐色土　ロームブロック多量　天井の崩落土を含む
4 暗褐色土　ロームブロック少量　天井の崩落土を含む
5 暗褐色土　ロームブロック中量　炭化材少量
6 黒褐色土
7 暗褐色土　ローム粒子少量
8 暗褐色土　ローム粒子少量

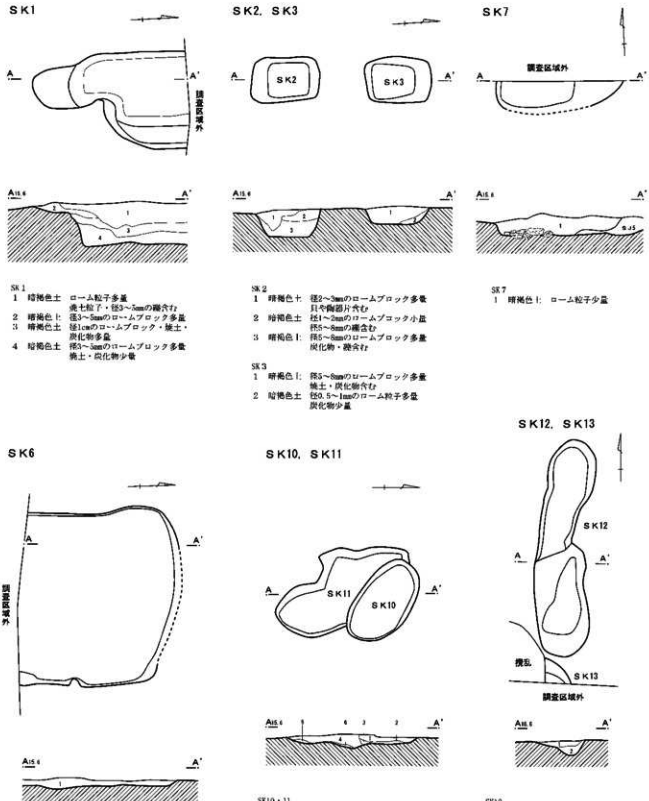


B−B'
1 明褐色土　径1〜2cmのロームブロック少量　ローム粒子全体に含む
2 褐色土　径3〜4cmのロームブロック少量
3 暗褐色土　径5mm程度のローム粒子中量　径3〜10cmの礫少量
4 径10〜20cm大のロームブロック上塊　暗褐色土含む　天井の崩落土
5 暗褐色土　径2〜3cmのロームブロック中量
6 暗褐色土　径2〜3cmのロームブロック少量
7 暗褐色土　径10cm程度のロームブロック少量
8 暗褐色土　径1cm程度のローム粒子多量
9 暗褐色土　ロームブロック(3cm)少　ローム粒子径2〜3mmを全体に含む
10 暗橙色土　ロームブロック・暗褐色土を10°に多く含む　天井の崩落土か

0　2m
1:60

第14図　第２号地下式坑

第15図　第２号地下式坑出土遺物



SK1
1 暗褐色土 ローム粒子多量
黄土粒子・径3～5mmの礫含む
2 暗褐色土 径3～5mmのロームブロック多量
3 暗褐色土 径1cmのロームブロック・焼土・炭化物多量
4 暗褐色土 径3～5mmのロームブロック多量
焼土・炭化物少量

SK2
1 暗褐色土 径2～5mmのロームブロック多量
貝や陶器片含む
2 暗褐色土 径1～2mmのロームブロック少量
径5～8mmの礫含む
3 暗褐色土 径5～8mmのロームブロック多量
炭化物・礫含む

SK3
1 暗褐色土 径5～8mmのロームブロック多量
焼土・炭化物含む
2 暗褐色土 径0.5～1mmのローム粒子多量
炭化物少量

SK7
1 暗褐色土 ローム粒子少量

SK6
1 暗褐色土 径0.5～1mmのローム粒子・
ロームブロック微量
径1～5cmの礫多量

SK10・11
1 暗褐色土 径5cm大のロームブロック多量
2 暗褐色土 ロームブロック1層より多 焼土・礫少量
3 暗褐色土 ロームブロック多量
4 暗褐色土 径1cmのロームブロック少量
5 黄褐色土 ロームブロック主体 暗褐色土含む
6 黄褐色土 ロームブロック多量 暗褐色土少量

SK12
1 暗褐色土 径5mm以下のローム粒子・
焼土粒子少量
2 暗褐色土 径2～3mmのロームブロック
多量

第16図 土坑

第２号土坑（第16図）

Ｅ－２グリッドに位置している。第１号住居跡、第２号住居跡を切る。平面形は方形で、主軸方向はＮ－０°－Ｅをとる。規模は南北1.04m、東西0.66m、深さ0.4mを測る。

出土遺物はほとんどない。第17図４は近世のいわゆる和釘である。他に灯明皿の破片がある。

第３号土坑との関係から、時期は近代に下る可能性がある。

第３号土坑（第16図）

Ｅ－１・２グリッドに位置している。平面形は方形で、主軸方向はＮ－０°－Ｅをとる。規模は南北１m、東西0.7m、深さ0.28mを測る。第２号土坑と南北に並ぶ。形状も類似するが共に性格は不明である。

出土遺物はほとんどない。第17図５は腰張形の小杯でコバルトの上絵付を施す。６は鍋でいわゆるミニチュアか。

第３号土坑の時期は明治時代とみられる。

第４号土坑

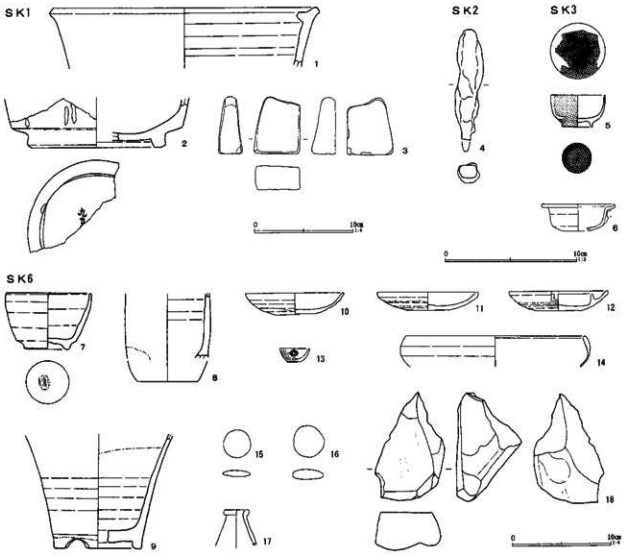
欠番。第１号地下式坑に変更。

第５号土坑

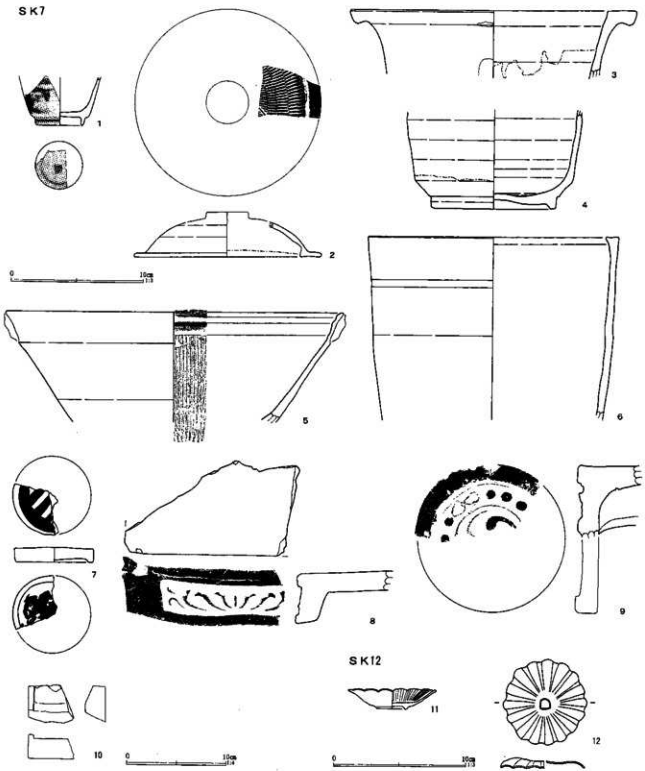
欠番。第２号地下式坑に変更。

第６号土坑（第16図）

Ｆ－２グリッドに位置している。平面形は不整方形で、南側が調査区外に及ぶ。第２号地下式坑の東



第17図　土坑出土遺物（１）



第18図　土坑出土遺物（2）

室と第５号住居跡を切る。主軸方向はＮ－０°－Ｅをとる。規模は南北2.46m、東西2.66m、深さ0.18mを測る。ごく浅い土坑である。出土遺物は比較的多く、遺物と共に径数cmから10cm大の礫が多数検出された。20cm大の被熱痕のある石片、鋳造鉄片等も散見された。第17図７は小杉碗を模倣した陶器。８は瀬戸美濃系の灰釉徳利で18世紀末～19世紀前葉とみられる。12は灯明受皿で18世紀後葉～19世紀初頭。

第６号土坑の時期はおおよそ19世紀前半におさまるとみられる。

第７表　土坑出土遺物観察表（第17・18図）

挿図番号		遺構		種別	器種	口径	器高	底径	残存	釉薬	焼成	生産地	備考
17	1	SK	1	陶器	水壺	(26.0)	[6.1]		破片	灰・緑釉	良好	瀬戸・美濃系	No.2と同一個体
17	2	SK	1	陶器	水壺		[5.1]	(13.7)	30	灰釉	良好	瀬戸・美濃系	底面に墨書あり「九月□」
17	3	SK	1	石製品	砥石	長さ [5.8]　幅4.6　厚さ2.4cm			70				泥岩か
17	4	SK	2	鉄製品	釘	長さ [5.5]　幅0.9　厚さ0.7cm			95				和釘　先端欠損
17	5	SK	3	磁器	小杯	4.1	2.4	2.3	完形	透明釉	良好	瀬戸・美濃系	文様：見込亀（上絵付），高台描画文，底面銘あり
17	6	SK	3	陶器	鍋	7.3	2.7	2.7	80	褐色釉	普通	瀬戸・美濃系	把取付ミニチュアか
17	7	SK	6	陶器	小鉢	8.5	6.7	4.4	90	黄褐釉	普通		底裏焼印
17	8	SK	6	陶器	徳利	(8.5)	[6.5]		破片	灰釉	普通	瀬戸・美濃系	胴下部
17	9	SK	6	陶器	植木鉢		[11.5]	8.6	50	灰釉	普通	瀬戸・美濃系	
17	10	SK	6	陶器	灯明皿	10.0	2.2	4.1	90	鉄釉	普通	瀬戸・美濃系	糸切底
17	11	SK	6	陶器	灯明皿	10.2	1.8	4.4	完形	鉄釉	普通	瀬戸・美濃系	糸切底
17	12	SK	6	陶器	灯明受皿	10.0	2.0	4.6	完形	鉄釉	普通	瀬戸・美濃系	受部径7.0cm，切込あり　糸切底
17	13	SK	6	磁器	紅猪口	2.3	1.0	1.1	完形	透明釉	良好	瀬戸・美濃系	菊花形　型押し文様：菊花（スタンプ）
17	14	SK	6	土器	焙烙	(18.0)	[3.2]		破片		普通		小形品　土師質
17	15	SK	6	土製品	碁石	径2.1　厚さ0.5cm			完形		普通		土師質
17	16	SK	6	土製品	碁石	径2.3　厚さ0.8cm			完形		普通		土師質
17	17	SK	6	土製品	小形壺	(1.9)	[2.7]		破片		普通	在地産	ミニチュア　白土塗り
17	18	SK	6	石製品	砥石	長さ [10.9]　幅 [6.5]　厚さ [6.2] cm　重さ350.9g							両面使用　不定形　安山岩
18	1	SK	7	磁器	小鉢		[3.6]	(3.6)	破片	透明釉	良好	瀬戸・美濃系	文様：風景図（山水か），底面銘あり
18	2	SK	7	陶器	鍋蓋	(14.0)	[2.6]		破片	緑褐色透明釉，外面無釉か	良好	飯能焼	笠低い　文様：不明（イッチン模様）
18	3	SK	7	陶器	植木鉢	(28.4)	[6.9]		20	灰・緑釉	普通	瀬戸・美濃系	二次被熱痕あり
18	4	SK	7	陶器	中甕		[10.0]	12.5	30	鉄釉	普通	瀬戸・美濃系	平胴甕
18	5	SK	7	陶器	擂鉢	(35.0)	[11.1]		40		良好		内面櫛目
18	6	SK	7	陶器	中甕	(25.0)	[18.5]		30	鉄釉	普通	瀬戸・美濃系	
18	7	SK	7	焼塩壺	蓋	(7.9)	1.5	(7.6)	30		普通		周囲墨書（表：○に三，裏：不明）
18	8	SK	7	瓦	軒平瓦	長さ [9.5]　幅 [14.3]　厚さ 2.0；瓦当部　長さ [16.0]　幅 5.0　厚さ2.8cm			30		良好	江戸式	表面に雲母粉　唐草文（子葉状に退化中心偏り開く）
18	9	SK	7	瓦	軒丸瓦	長さ [6.5]　厚さ2.1；瓦当部　径 [15.0]　厚さ2.2cm			30		良好	江戸式	雲母粉（瓦当表）連珠三巴右巻
18	10	SK	7	石製品	硯	長さ [3.8]　幅[4.6]　厚さ2.5cm			15				泥岩　重さ51.8g
18	11	SK	12	磁器	極小皿	6.7	1.5	2.2	70	透明釉	良好		菊花形
18	12	SK	12	銅製品	飾金具	幅4.3　高さ0.5　厚さ0.1cm							菊花形

第７号土坑（第16図）

Ｆ－１グリッドに位置している。平面形は不整円形で、北側は調査区外に及ぶ。第５号住居跡を切る。主軸方向はＮ－87°－Ｅをとる。規模は確認された範囲で南北0.5m、東西1.94m、深さ0.15mを測る。

出土遺物は第６号土坑に次いで多く、北壁でまとまって検出された。第18図２は飯能焼の鍋蓋である。中形で笠が低くなるものと見られる。内面施釉、外面に飛び鉋とイッチン描の模様が施される。飯能焼の主力である行平鍋に付く蓋と考えられる。飯能焼は緑褐色釉を用い、白化粧土によるイッチン描、飛び鉋による模様が特徴的であり、本資料は飯能焼の特徴をよく備えている。ほかに小鉢、甕、擂鉢、焼塩壺などがある。３の植木鉢は外面に被熱痕がある。瓦はいわゆる江戸式で、軒平瓦の唐草文がかなり退化している。

第７号土坑は、第３号土坑のように明らかな近代の遺物を含まない。陶磁器は全体的に19世紀代の様相を示す。飯能焼の開窯が1830年頃とされることから、時期は19世紀中葉と考えられる。

第８号土坑

欠番

第９号土坑

欠番

第10号土坑（第16図）

Ｅ－２グリッドに位置している。平面形は円形で、第11号土坑を切る。主軸方向はＮ－52°－Ｗをとる。規模は長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.11mを測る。

出土遺物はない。

第11号土坑（第16図）

Ｅ－２グリッドに位置している。平面形は不整形で、第10号土坑に切られる。主軸方向はＮ－26°－Ｗをとる。規模は長軸2.24m、短軸1.16m、深さ0.09mを測る。浅く植栽状を呈する。

出土遺物はない。

第12号土坑（第16図）

Ｅ－１・２グリッドに位置している。平面形は不整長楕円形である。第11号土坑と接するが、切りあい関係は不明である。主軸方向はＮ－３°－Ｅをとる。規模は南北3.26m、東西0.48m、深さ0.35mを測る。北側が浅く南側が深い。

出土遺物は極少なく、２点を図示した。第18図12は箪笥等に付く青銅製の飾金具である。

第13号土坑（第16図）

Ｅ－２グリッドに位置している。西側を大きく攪乱され、全体の形状は不明確である。確認範囲の規模は南北0.4m、東西0.4m、深さ0.1mを測る。遺構の北西辺は弧状を呈する。住居跡等の可能性もあるが、遺構の南側が調査区外で不明なため、土坑とした。

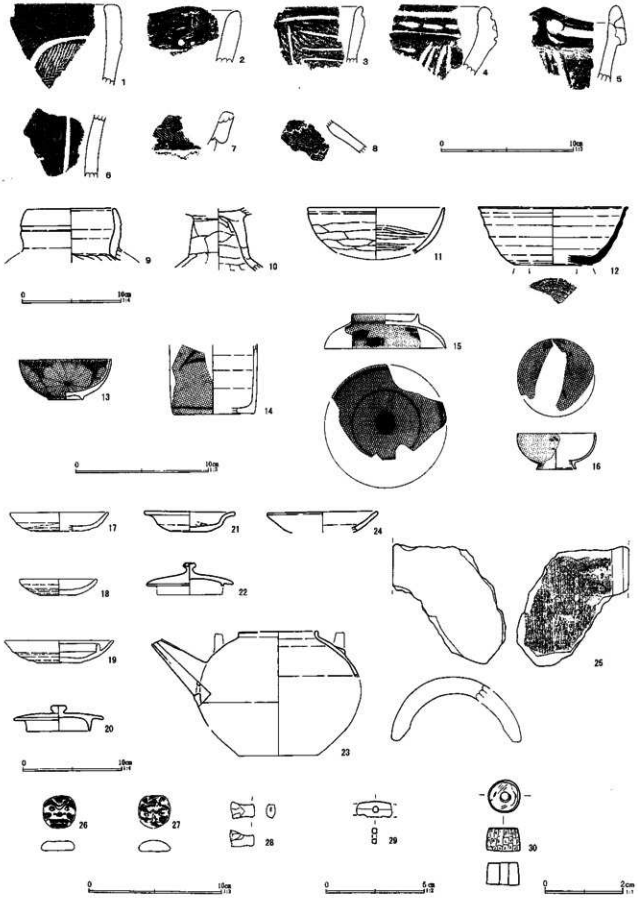
出土遺物はなく、時期は不明である。

４．遺構外出土遺物

調査時に出土した帰属遺構不明の遺物を第19図に示した。１～６は縄文土器で、１はいわゆる称名寺Ⅰ式、２も称名寺式か。３～６は堀之内式と考えられる。縄文土器は20点出土しているが、時期の分かるものはすべて後期である。７、８は弥生後期の土器で壺の口縁と肩部である。縄文、弥生ともに時期的に限られた資料が出土しており、該期の遺構が周囲に存在するものと予想される。

９～12には古墳時代および古代の遺物を掲げた。９～11は土師器である。９は古墳時代中期の壺と見られ形が特徴的である。12は回転篦ケズリの須恵器。

13、15、17～25は近世の陶磁器類である。13、15は肥前系の磁器。13は碗で18世紀代か。15は広東碗の蓋で18世紀末～19世紀前葉。18の灯明皿は径が小さく、19の灯明受皿とともに19世紀前半の新しい様相を示す。22、23は同一個体の青土瓶である。19世紀前半とみられる。24はかわらけである。26～28は土製品。26、27は泥面子。28は小片だが、鳥形をした土笛の吹き口である。肥前系の磁器がやや古い様相を示すが、遺構出土遺物の年代観を考慮すれば、



第19図　遺構外出土遺物

第８表　遺構外出土遺物観察表（第19図）

挿図番号		遺構		種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土／色調または釉薬	焼成	生産地（陶磁器）	備　考
19	7	D	1	弥生土器	壺				破片	赤粒／橙褐	良好	－	折り返し口縁 赤彩あり
19	8	SK	4	弥生土器	壺				破片	赤粒／橙褐	良好	－	肩部文様帯
19	9	E	1	土師器	壺	(9.0)	[5.2]		25	白粒　赤粒／橙褐	良好	－	口縁部内湾 古式土師器か
19	10	D	1	土師器	高坏		[6.4]		50	角　白粒　赤粒／赤褐	良好	－	
19	11	E	1	土師器	坏	(13.8)	[4.6]		30	白粒　赤粒／淡褐	良好	－	佐波型模倣
19	12	SK	6	須恵器	埴	(15.0)	5.8	(3.9)	20	針／灰	良好	－	外面自然釉 京金子産
19	13	F	1	磁器	小鉢	6.9	3.0	2.6	75	／透明釉	良好	肥前系	文様：菊花つなぎ
19	14	D	2	磁器	燭台利		[5.3]	(6.0)	破片	／透明釉	良好		文様：圏線　草花
19	15	F	1	磁器	碗蓋	9.2	2.6	5.0	75	／透明釉	良好	肥前系	広東碗　文様：圏線 亀甲　松，内面　圏線　松，高台内　松
19	16	F	2	磁器	小杯	(5.8)	3.0	(3.0)	50	／透明釉	良好	瀬戸・美濃系	文様：有り（上絵付） ・高台　構向文，見込　草（上絵付）
19	17	F	2	陶器	灯明皿	(10.0)	1.9	(4.8)	25	／鉄釉	普通	瀬戸・美濃系	糸切底
19	18	グリッド		陶器	灯明皿	7.8	1.6	3.4	完形	／鉄釉	普通	瀬戸・美濃系	糸切底　小形
19	19	F	2	陶器	灯明受皿	11.0	2.2	(4.6)	50	／鉄釉	普通	瀬戸・美濃系	受部径7.8cm，切込不明　糸切底
19	20	E	1	陶器	蓋	8.9	2.6	内径6.3	80	／鉄釉	良好		
19	21	E	1	陶器	蓋	(9.1)	2.0	(3.9)	70	／灰釉	普通	瀬戸・美濃系	内側にツマミ
19	22	F	1	陶器	蓋	(8.5)	[2.4]		30	／緑釉	良好		青土瓶 （No.23と同一）
19	23	F	1	陶器	土瓶	(8.0)	[9.5]		40	／緑釉	良好		青土瓶　胴部最大径 (17.0) cm
19	24	F	1	土器	かわらけ	(11.0)	[2.0]		30	／にぶい橙	普通		体部赤色
19	25	E	2	瓦	丸瓦	長さ [10.0]　幅 [7.0]　厚さ1.8			25		普通	江戸式	表面に雲母粉
19	26	F	1	土製品	泥面子	長さ2.4　幅2.5　厚さ0.7cm			完形		普通		鬼
19	27	表採		土製品	泥面子	長さ2.5　幅2.4　厚さ0.9cm			95		普通		人面
19	28	F	2	土製品	土笛	長さ [1.8] 幅 [1.3] 厚さ [1.2]			破片		普通	在地産	鳥形笛の吹き口 色塗り
19	29	D	1	銅製品	不明	長さ1.9　幅0.8　厚さ0.2　孔径0.25cm							日本刀の目貫か
19	30	D	1	石製品	臼玉	径：上0.76，下0.80，最大0.80　厚さ0.50cm　重量0.61g							上下研磨　下面やや広い直線的

全体として19世紀におさまるものと見られる。14、16は明治時代の磁器である。

29は欠損部が多いが穴を挟んで稜を持つ。日本刀の目貫とも考えられるが穴がやや小さく、不明の銅製品とした。30は滑石製の臼玉。径0.8cmとやや大きい。出土地点から第７号住居跡にともなう可能性が高い。

V　調査のまとめ

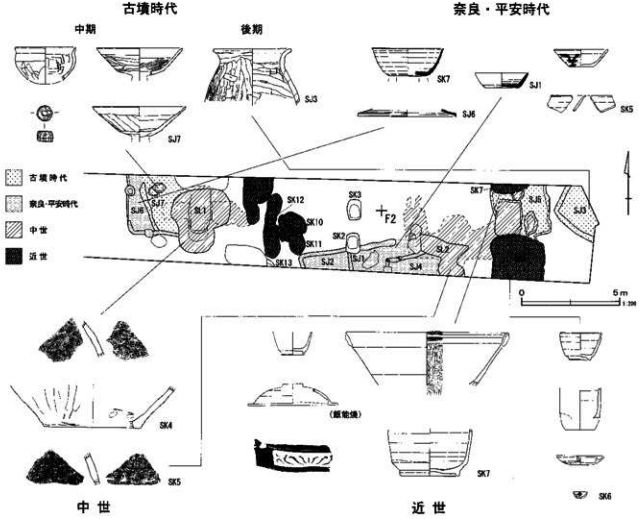
古墳時代から古代の遺構について

古墳時代では３軒の住居跡が検出された。第５号、第７号住居跡は中期、第３号住居跡は後期である。氷川神社遺跡では古墳中期の剣形の石製模造品も採集されている(*1)。奈良・平安時代の遺構は住居跡４軒であった。遺構にともなう遺物が少ないが、第６号住居跡で８世紀、第１号住居跡で９世紀の須恵器が出土し、８世紀から氷川神社遺跡に集落のあったことが分かる。ほかに「无」の墨書を有する土師器や緑釉陶器が出土しており、集落は10世紀頃まで継続していたと推測される。

中世の地下式坑について

地下式坑は中世に特徴的な遺構のひとつで、埼玉では昭和30年に東松山市で初めて発見された（金井塚1957）。地下式坑は関東甲信地方に最も多く、滋賀周辺や北九州にも分布が認められる。その構造は地上から入口となる竪坑を掘り込み、竪坑底面から横へ掘り進んで地下に主室を築く(*2)。年代的には13～16世紀となる。地下式坑の性格については墓壙説と貯蔵施設説があり、中田英氏は地下式坑の形態分類を基にその機能を推定した（中田1977）。半田堅三氏は千葉県台遺跡の事例から、中世仏教を背景とした墓地内の一施設とし（半田1979）、その後、地下式坑と禅宗の葬送儀礼との関係が指摘されるなど墓壙説が補強されてきた（江崎1985, 池上1986）。

近年では簗瀬裕一氏が墓壙説を否定して改めて貯蔵施設説を唱え（簗瀬2001）、笹生衛氏は遺跡の立地や他の遺構との関係から、耕作地や道周辺に点在



第20図　氷川神社遺跡の主な遺構・遺物

する貯蔵施設とする（笹生2003）など、地下式坑の機能について、意見の一致は得られていない。

氷川神社遺跡で検出された地下式坑は2基である。主室は複数の部屋に分かれ、半田（1979）の無段E1類にあたる。第1号地下式坑の竪坑は主室と直接つながり、主軸に対し縦長の中央室が広がる。中央室から東西に部屋が広がり、中央室との境に段差を持つ。第2号地下式坑は竪坑と主室の間に短い主室入口部を持つ。本文で中央室の北中央が台形に張り出すとしたが、単純に十字形の主室と見るべきかもしれない。奥には段差を持って西室・東室があり、東室は上部に開口する。2基は複室という点で同じだが平面形態が異なる。

中世には氷川神社は既にあり、川越城跡には太田氏が館を築いていたが、調査地点に神社や城館の施設が及んでいた証拠は無く、17世紀以前の土地利用はよく分からない。氷川神社遺跡の地下式坑の性格は現時点では不明としておく。

川越市周辺の地下式坑を見ると（第9表）、川越城跡、川越館跡（霞ヶ関、天王遺跡含む）、戸宮前館跡、宮廻館跡が中世城館で、他に確実な城館の事例は無い。大井氏館跡は武蔵七党の大井氏一族の館跡と想定され、発掘調査から隣接する本村遺跡と共に13世紀から17世紀までの集落と判明しているが、館跡との確証は得られていない。地下式坑の主室は3～7㎡前後で横長方形が多く、複室を持つのは氷川神社遺跡など8例ほどである。表に示さなかったが、時期的には15・16世紀に構築されたものが多い。

今回の集成中に人骨出土例はない。川越城跡のSL1、SL2で板碑片が出土しているが、これだけで墓壙とは断言できない。近隣では所沢市城上遺跡で人骨4体の発見例があるが、管見の限り江崎氏の想定した葬法は発掘から明らかではない。墓域に立地するという半田氏の指摘も、例えば火葬土坑と対比した場合、近隣では東松山市代正寺・大西遺跡、鶴ヶ島市お寺山遺跡でしか地下式坑の検出例はない(*3)。また地下式坑は城館跡とその他の遺跡から半々検出されているが、城館に墓が付随する確証もない。墓壙説については土壙墓や火葬土坑との関係、広く中世墓としての検討が不足しているように思われる。

地下式坑の配置・立地に注意してみると、川越城跡SL4は同時期の柵列の南に位置し、柵列を向いて直交方向に主室を設ける。河越館跡は常楽寺の成立期で、地下式坑は全て堀・溝と同方向である。天王遺跡15次1～3号は道路状遺構沿いに並んで道路北側に主室を設け、道路南の区画にある方形竪穴と同じ軸方向をとる。戸宮前館跡1号は館の区画溝と同方向である。宮廻館跡の地下式坑は館の区画内で中央の掘立柱建物と区画溝の間に位置し、溝に沿って溝側に主室を設ける。北榛現遺跡は低地に面した斜面地を段切りし、平坦面に方形竪穴、緩斜面に地下式坑を設ける。本村遺跡104地点では低地に面した斜面の段切りに立地する。なお高崎直成氏は本村遺跡・大井氏館跡の地下式坑は是敷地と寺院・墓域の両方に立地すると述べている（高崎1998）。

以上のように、城館では溝、集落や寺院では溝・段切・方形竪穴と軸方向が共通し、開口部を館内や建物側に設ける傾向がある。事例を見る限り遺跡内の他遺構との関わりが強く、宮廻館跡など規則的配置が想定される例もある。この点、田中信氏による地下式坑の配列規則の検討が注意される（田中1989）。

地下式坑は貯蔵穴など生業関連遺構とする方が妥当性が高いと思われるが、その性格を解明するためには、立地や周辺遺跡との関係等、より広い観点から検討を進める必要があると考えられる。

近世の遺構と遺物について

第1号土坑は東に張り出しを持つ長方形で、貯蔵穴等の可能性がある。第6号土坑、第7号土坑は廃棄坑である。ほかの土坑はF－1グリッドにまとまるが、不定形で性格は不明である。遺物から確実に年代の推定出来るのは第6号、第7号土坑である。第6号土坑では徳利や灯明受皿の生産年代が1770～1830年頃と推定され、遺構出土遺物が全体に18世紀代に確実に遡る例がないことから19世紀前葉に廃棄されたと理解されよう。第7号遺構は飯能焼の存在から1830年代以降で、明治時代以前の19世紀中葉と

第9表　川越市周辺の地下式坑

	市町村	遺跡名	遺構名	主室規模(m) 長軸	短軸	高さ	床面積(㎡)	主室平面形
1	川越市	氷川神社遺跡	SL 1	1.77	4.54	1.05	4.67	逆T字形
2			SL 2	3.00	5.96	1.20	10.97	三叉
3	川越市	川越城跡9次	SL 1	(0.90)	4.00	1.20	(3.60)	楕円方形
4			SL 2	(3.20)	2.56	0.77	(6.19)	方形?
5			SL 3	1.80	1.73	1.27	3.11	方形 -
6			SL 4	1.20	1.87	1.00	2.24	楕円方形
7	川越市	河越城跡　整備	1号地下式坑	(1.20)	(0.80)	-	0.96	方形?
8			4号地下式坑	1.50	1.92	0.80	2.88	方形
9			5号地下式坑	1.60	1.38	0.66	2.48	方形
10			6号地下式坑	(1.80)	(2.52)	0.90	4.54	楕円方形
11			7号地下式坑	1.98	(1.50)	0.80	(2.97)	方形
12		8次	地下式坑	2.20	1.90	1.27	4.18	楕円方形
13	川越市	鴨ヶ岡遺跡17次	1号地下式坑	(1.30)	2.50	(1.66)	(3.25)	楕円方?
14			2号地下式坑	(2.26)	2.34	1.68	(6.04)	楕円方形
15	川越市	天神遺跡　7次	1号地下式坑	1.40	1.25	0.85	1.75	楕円方形
16		15次	1号地下式坑	1.80	1.40	1.30	2.52	楕円方形
17			2号地下式坑	1.90	2.80	(2.10)	5.32	楕円方形
18			3号地下式坑	1.90	4.10	(1.90)	7.79	楕円方形
19			4号地下式坑	2.90	1.00	(1.00)	2.90	楕円方形
20	川越市	お宮前遺跡	1号地下式坑	2.30	3.20	(1.30)	7.36	楕円方形
21	川越市	宮城跡群	24号土坑	3.60	2.22	(1.26)	7.99	楕円方形
22			38号土坑	2.30	3.40	(1.65)	7.82	楕円方形
23			39号土坑	2.85	3.75	(1.33)	10.69	L字形
24			40号土坑	1.15	1.65	(1.50)	1.90	楕円方形
25			41号土坑	0.90	1.25	(1.67)	1.13	楕円方形
26			42号土坑	2.00	2.90	(1.47)	5.80	楕円方形
27			43号土坑	(1.54)	2.38	(1.02)	(3.67)	楕円方形
28			44号土坑	2.45	4.03	(1.59)	9.87	楕円方形
29			45号土坑	3.25	4.65	(1.70)	10.46	楕円方形
30			46号土坑	1.82	4.30	(0.49)	8.19	楕円方形
31			130号土坑	2.00	3.85	(1.20)	7.70	楕円方形
32			145号土坑	2.46	4.70	(1.13)	11.28	楕円方形
33			153号土坑	(1.82)	(3.50)	(0.63)	2.73	方形
34			160号土坑	2.60	(2.30)	1.80	(5.98)	方形
35	川越市	鴨ヶ谷遺跡	C区(31)土坑	3.75	4.40	(0.98)	12.11	逆T字形
36	鶴ヶ島市	番匠遺跡	1号土坑	1.16	4.50	0.60	5.42	逆T字形
37			2号土坑	2.40	1.15	0.83	2.76	楕円方形
38			3号土坑	2.70	1.30	0.85	3.51	楕円方形
39			4号土坑	1.90	1.30	0.50	7.60	逆T字?
40	鶴ヶ島市	お寺山遺跡の坑穴	9～11号土坑	3.50	3.75	0.84	5.77	T字(3本)
41			14号土坑	1.80	(0.67)	(0.90)	(1.21)	方形?
42		E地点	2号地下式横穴	2.00	2.00	0.70	4.00	方形
43	鶴ヶ島市	北後閑遺跡1次	80号土坑	1.90	2.60	(1.00)	4.94	楕円方形
44			103号土坑	2.45	2.05	(1.10)	5.02	方形
45			106号土坑	1.85	2.00	(0.80)	3.70	方形
46			107号土坑	2.10	2.60	1.60	5.46	方形
47			117号土坑	1.92	2.52	(0.90)	4.84	楕円方形
48			136号土坑	2.30	2.80	(1.10)	7.00	楕円方形
49	鶴ヶ島市	沢山遺跡3次	地下式坑	3.20	3.80	(0.80)	12.16	方形
50	入間郡毛	神明塚遺跡16地点	地下式坑	2.10	2.40	0.84	5.04	方形
51	入間郡毛	東原遺跡2地点	1号地下式坑	1.71	2.19	0.57	3.52	楕円方形
52		3地点	1号地下式坑	3.31	2.78	1.80	8.69	楕円方形
53	入間郡毛	大井沢遺跡3地点	1号地下式坑	1.88	2.45	1.01	4.22	楕円方形
54			2号地下式坑	3.32	1.91	0.99	5.44	楕円方形
55			5号地下式坑	4.32	1.62	1.41	5.66	楕円方形
56			7号地下式坑	4.37	1.41	1.51	9.99	楕円方形
57			8号地下式坑	1.71	3.05	1.33	4.54	
58		6地点	地下式坑	2.87	2.85	1.85	7.61	楕円方形
59			9号地下式坑	2.44	3.01	2.44	6.37	楕円方形
60			10号地下式坑	3.06	2.31	2.15	6.09	
61		8地点	11号地下式坑	4.22	1.68	1.57	6.73	楕円方形
62	入間郡毛	本村遺跡3地点	1号地下式坑	2.20	2.36	1.20	3.97	楕円方形
63		17地点	1号地下式坑	5.47	4.00	1.78	15.40	逆T字形
64		19地点	2号地下式坑	1.68	1.89	0.38	2.27	楕円方形
65			3号地下式坑	2.00	1.54	0.69	2.95	楕円方形
66			4号地下式坑	2.10	2.04	0.57	4.41	方形
67		21地点	2号地下式坑	2.65	2.66	1.49	4.18	楕円方形
68		24地点	3D	1.99	1.51	1.19	2.65	楕円方形
69			14D	3.69	2.27	1.53	7.43	楕円方形
70			33D	2.29	2.29	0.74	4.87	方形
71			39D	3.26	2.15	0.26	6.13	楕円方形
72			41D	2.07	1.66	0.89	3.17	楕円方形
73			44D	2.88	3.27	0.43	7.09	楕円方形
74		28地点	3号地下式坑	5.18	3.42	1.78	11.17	逆T字形
75			4号地下式坑	4.84	2.17	2.01	3.06	楕円方形
76			5号地下式坑	2.53	2.00	1.48	9.28	楕円方形
77			6号地下式坑	4.35	1.95	1.09	6.80	楕円方形
78			7号地下式坑	1.77	1.80	0.96	2.92	楕円方形
79		29地点	1号地下式坑	3.18	2.05	0.28	5.18	楕円方形
80			2号地下式坑	4.02	2.34	1.45	8.35	楕円方形
81		31地点	1号地下式坑	2.27	1.27	0.73	2.35	楕円方形
82			2号地下式坑	1.89	1.73	0.72	2.71	方形
83		48地点	2号地下式坑	2.36	1.86	0.67	4.21	楕円方形
84			3号地下式坑	1.54	2.22	0.57	2.76	楕円方形
85		52地点	2号地下式坑	2.00	2.72	1.74	4.48	楕円方形
86		62地点	1号地下式坑	2.77	1.50	0.86	3.86	楕円方形
87			2号地下式坑	1.73	1.20	0.70	1.65	
88		104地点	地下式坑1	2.00	2.72	(0.61)	5.44	楕円方形
89			地下式坑2	1.98	3.00	(0.54)	5.94	楕円方形
90	入間郡毛	川越遺跡1次	LS43	2.70	3.20	1.90	9.45	楕円方形
91			LS99	1.62	2.70	(1.44)	4.37	楕円方形
92	一方郡	本村古墳跡	1号地下式坑	2.35	3.20	1.40	7.52	楕円方形
93	富士見市	百軒遺跡6地点	2号地下式坑	1.60	4.00	1.30	6.40	楕円方形
94	富士見市	打越遺跡1次	8号土坑	2.00	2.30	(1.30)	5.00	楕円方形
95		2次	6号土坑	2.72	4.24	(2.70)	11.53	楕円方形
96		9次	6号地下式坑	2.75	3.30	1.70	8.98	楕円方形
97			7号地下式坑	2.50	3.65	1.30	9.13	楕円方形
98		10次	9号地下式坑	2.70	2.50	1.30	6.75	方形

＊川越市ほか市町、近世以降は除く。規模の（　）は現存値、表さは標高からの深さ。主室平面形の楕円方形・楕円方形は池上(1986)の長方形・T字形、逆T字形は高橋(1988)の「T字形

考えられる。すなわち近世の遺構の年代は19世紀前葉から中葉で、19世紀代にほぼ収まる。この時期の調査地点は武家屋敷の変化（第Ⅱ章参照）。推測の域を出ないが、掘立柱建物跡も確認されておらず、庭などの空間にあたるものだろうか。

第7号土坑からは飯能焼が出土した。飯能焼原窯は現在の飯能市原町に所在した地方窯である。文献から天保3年(1832)には開窯され、明治20年(1887)までの50余年にわたり生産が行われた。緑褐色釉を用い、白化粧土によるイッチン模様、鎬類に多い飛ガンナによる模様が特徴的である。窯跡の発掘調査によって、鍋を主体に灯明皿・皿・合子・徳利・土瓶・急須・蒸器などの器種で構成されることが判明している（宮元1999）。消費地では江戸や多摩地域、川越城下から出土する。川越では川越城跡や東明寺南遺跡において出土しており、小皿・皿鉢・徳利・行平鍋・鍋蓋が主体となる（尾崎2001）。川越城跡の例は近世、東明寺南遺跡の例は明治前半にあたる。

氷川神社遺跡の資料は鍋蓋の破片であり、共伴する遺物から幕末の19世紀中葉と考えられる。小片だが飯能焼の類例が市内で追加されたことは、19世紀川越城下の生活をうかがう資料として意義である。

＊1）川越市教育委員会教示。川越市立博物館1997b：p36

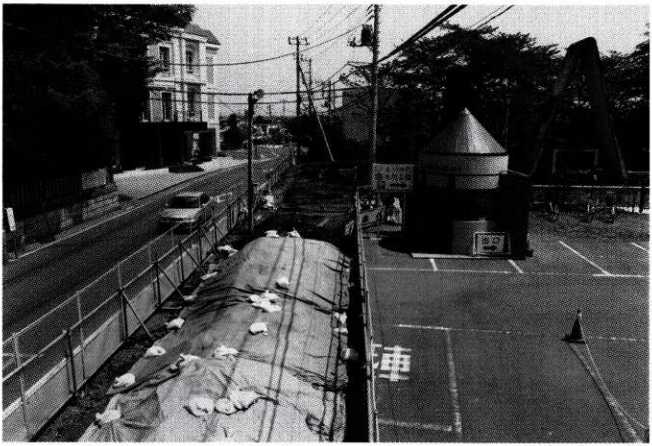
＊2）ここでは中世研究プロジェクトチーム（1995）の呼称に従った

＊3）松岡（2005）の火葬土坑の集成による

引用・参考文献

天ヶ嶋岳　2001『河越館跡史跡整備に伴う発掘調査（第１次～第４次調査）』川越市教育委員会
天ヶ嶋岳　2003『愛宕神社古墳遺跡（第２次調査）・新宿２丁目遺跡（第１次調査）』川越市遺跡調査会
天ヶ嶋岳　2003「荒川右岸におけるいわゆる「宮ノ台式集落」の一様相」『川越城跡　第11次調査』川越市教育委員会　pp.76-84
池上悟　1986「地下式壙瞥見」『立正史学』59　pp.45-74
江崎武　1985「中世地下式壙の研究」『古代探叢２』早稲田大学出版部　pp.593-616
荻野将盛・岡田賢治　2001『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅶ）』川越市教育委員会
尾崎泰弘　2001「黎明のとき　飯能焼・原窯からの発信」飯能市郷土館
金井塚良一　1957「東松山市高坂の地下式坑」『埼玉研究』創刊号　pp.55-59
金子直行　2001「川越城／小在家Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
川越市教育委員会文化財保護課　1996～2004『川越市文化財保護年報』平成７年度～平成15年度版　川越市教育委員会
川越市立博物館編　1993『川越城　失われた遺構を探る』川越市立博物館
川越市立博物館編　1997ａ『町割から都市計画へ　絵地図でみる川越の都市形成史』川越市立博物館
川越市立博物館編　1997ｂ『川越氷川祭礼の展開』川越市立博物館
川越市立博物館編　2000『河越氏と河越館』川越市立博物館
小泉功　1993ａ『熊野神社西遺跡（一次～三次）発掘調査報告書』川越市教育委員会・川越市遺跡調査会
小泉功　1993ｂ『小仙波四丁目遺跡（第５次）発掘調査報告書』川越市教育委員会・川越市遺跡調査会
小泉功・城近憲市・田中信　1988『登戸南・会下・浅間下遺跡調査報告概要』川越市遺跡調査会
小泉功・城近憲市　1988「第３浅間下・会下遺跡調査報告書』川越市遺跡調査会
埼玉県教育委員会文化財保護課『埼玉の遺跡マップ』http://www.saimaizou.jp
笹生衛　2003「地下式坑の掘られた風景」『戦国時代の考古学』高志書院　pp.587-598
佐藤律子　1997「東京大学本郷構内の遺跡出土土瓶の変遷」『江戸陶磁器研究会会報』27　pp.2-13
瀬戸市埋蔵文化財センター編　1997『「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界」の記録』『研究紀要』５　瀬戸市埋蔵文化財センター
田尾誠敏　1994「越境する相模型土器」『東海大学校地内遺跡調査団報告』４　pp.127-149
高崎直成　1998「大井町検出の地下式壙について」『町内遺跡群Ⅵ』大井町教育委員会　pp.132-136
田中信・落合義明　1996『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書　第11集』川越市教育委員会
田中信　1988『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅶ）』川越市教育委員会
田中信　1989「地下式坑遺構群」の配列規則について」『愛宕神社古墳北遺跡』川越市遺跡調査会　pp.41-50
田中信・町田明弘　1992「川越市埋蔵文化財発掘調査報告書（Ｘ）』川越市教育委員会
中世研究プロジェクトチーム　1995「神奈川県下における中世遺構の研究」『神奈川の考古学』５　pp.98-113
中世を歩く会編　2002『在地土器検討会―北武蔵のカワラケ―　記録集』中世を歩く会
富元久美子　1999『飯能の遺跡27　飯能焼原窯跡第１・２次調査』飯能市教育委員会
中田英　1977「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』２　pp.71-103
西川正己　1988「地形・地質」『川越大事典』国書刊行会　pp.28-34
半田堅三　1979「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』２　pp.1-28
半田堅三　1993「地下式壙再考」『市原市文化財センター研究紀要』２　pp.387-410
飯能市史編集委員会編　1988「窯業の盛衰　飯能焼」『飯能市史』飯能市役所　pp.332-343
平野寛之　2002『弁天西遺跡（第15次発掘調査）』川越市教育委員会・川越市遺跡調査会
平野寛之　2002「入間郡―霞ヶ関遺跡」『坂東の古代館衙と人々の交流』埼玉考古別冊６　pp.192-193
平野寛之　2003『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書（13）』川越市教育委員会
平野寛之　2004『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集』川越市教育委員会
占谷峯彦　1997「池之端七軒町遺跡の土壌分析」『池之端七軒町遺跡（慶安寺跡）』池之端七軒町遺跡調査会　pp.271-280
堀内秀樹　1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』１　pp.279-305
堀口万吉　1986「埼玉県の地形と地質　１地形」『新編埼玉県史　別編３自然』埼玉県　pp.7-28
松岡有希子　2005「中世の火熱土坑について」『下田町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団　pp.779-785
水本和美編　1998『伝中・上富士前Ⅱ』豊島区教育委員会
簗瀬裕一　2001「房総の地下式坑について」『千葉史学』37　pp.33-53
簗瀬裕一　2006「地下式坑の分類と編年試論」『房総中近世考古』２　pp.1-40

写 真 図 版



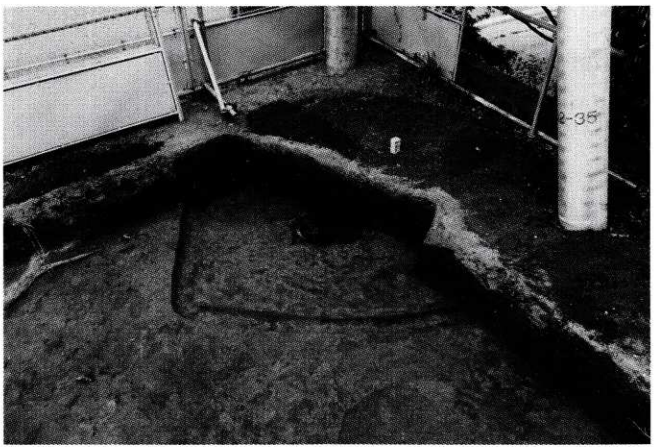
1　調査区全景（西から）

2　調査区東側全景（西から）

1　第１号・第４号住居跡

2　第１号住居跡カマド遺物出土状況

1　第２号住居跡



2　第３号住居跡

1　第３号住居跡遺物出土状況

2　第５号住居跡・第７号土坑

1　第6号・第7号住居跡

2　第7号住居跡遺物出土状況

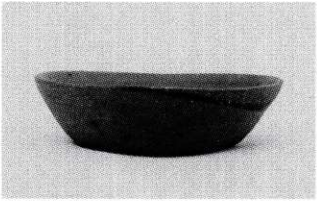
1　第１号地下式坑

2　第２号地下式坑（東室入口）

1　第２号地下式坑内部（中央室西側から入口部を臨む）

2　第１号土坑

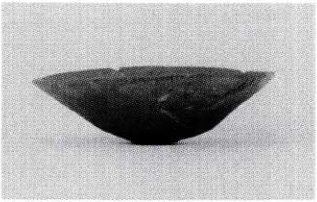
1　第６号土坑遺物出土状況



2　第１号住居跡（第７図１）

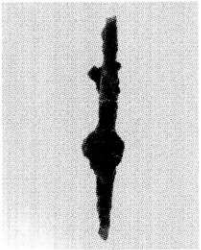
3　第２号地下式坑（第15図１）

4　第７号住居跡（第11図２）



5　第７号住居跡（第11図３）

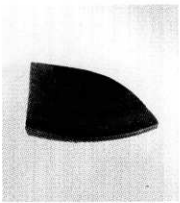
1　第３号住居跡（第９図１）



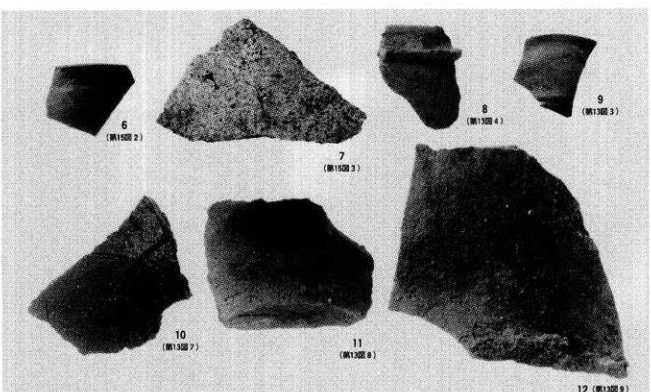
2　第１号住居跡（第７図３）

3　第７号住居跡（第11図１）

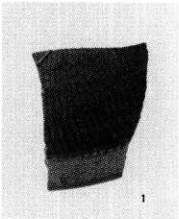
4　第７号住居跡（第11図４）



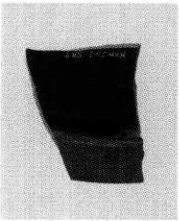
5　第６号住居跡（第11図９）

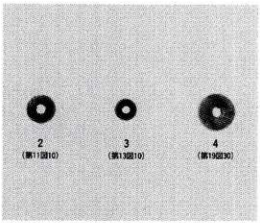


6～12　第１号・第２号地下式坑

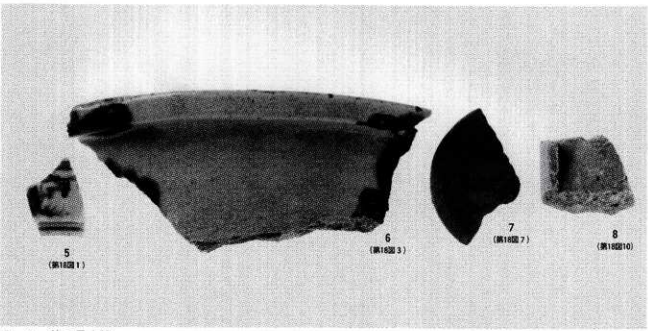


1　第７号土坑（第18図２）

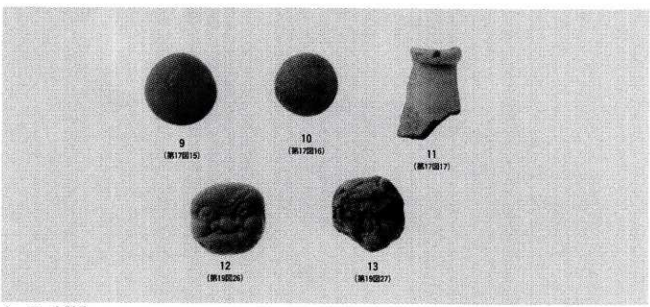




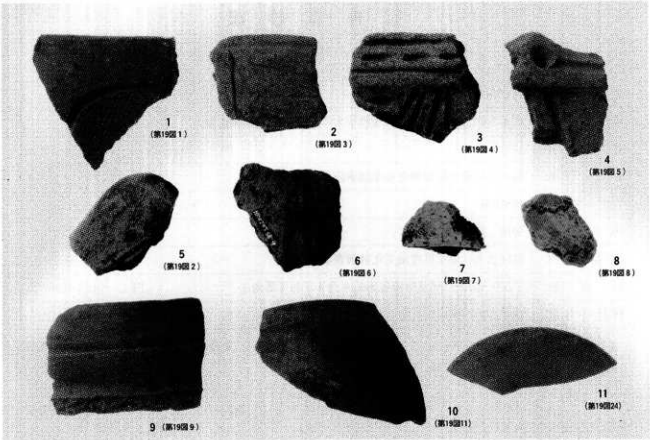
2～4　臼玉



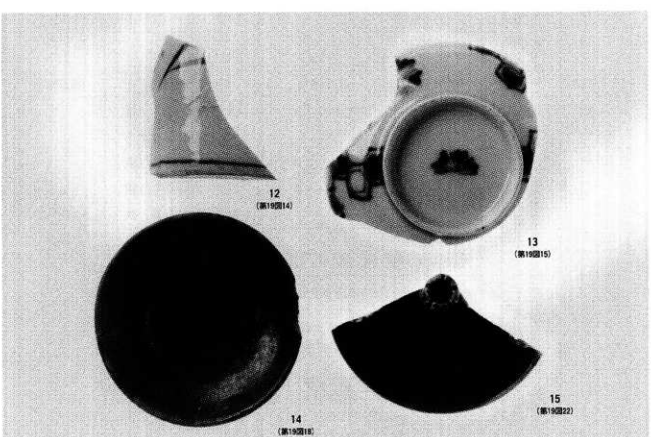
5～8　第７号土坑



9～13　土製品



1～11　遺構外出土遺物



12～15　遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひかわじんじゃいせき
書名	氷川神社遺跡
副書名	都市計画道路川越上尾線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第329集
編著者名	菊地　真
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369－0108　埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1　TEL　0493－39－3955
発行年月日	西暦2007（平成19）年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ひかわじんじゃいせき 氷川神社遺跡	さいたまけんかわごえし 埼玉県川越市 みやしたちょういっちょうめ 宮下町　一丁目11－26 ばんち 番地他	11201	102	36°04′41″	140°10′21″	20040409～ 20040430	330	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
氷川神社遺跡	集落跡	古墳時代中期 奈良・平安時代 中世 近世	竪穴住居跡　7軒 地下式坑　2基 土坑　9基	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・陶器（常滑）・陶磁器・土製品・臼玉・石器・鉄製品・銅製品	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第329集

川　越　市

氷川神社遺跡

都市計画道路川越上尾線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告

平成19年２月20日　印刷
平成19年２月28日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　埼玉県熊谷市船木台４－４－１
電話　0493（39）3955
http：//www.saimaibun.or.jp
印刷／関東図書株式会社